

〔資料〕

妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』翻刻と解題（2）

寺津 麻理絵・関口 静雄

〔解題2〕浄厳と梵鐘

1 浄厳撰文鐘銘

妙高山靈光寺に伝わる覚彦浄厳の遺稿集『妙極堂遺稿』（写本、全七巻七冊）の中には、浄厳和尚が撰した梵鐘の銘文が収録されている。一覧すると以下のようである。

- ① 「頭陀寺^{并序}」（巻五、寛文十年（一六七〇）三十二歳条）
- ② 「越中芹谷山千光寺銅鐘銘」（巻六、延宝四年（一六七六）三十八歳）
- ③ 「龍泉寺銅鐘銘」（巻六、延宝四年（一六七六）三十八歳）
- ④ 牛頭山極楽密寺長徳院銅鐘銘（巻六、延宝五年（一六七七）三十九歳）
- ⑤ 「和州青龍寺銅鐘銘」（巻六、延宝六年（一六七八）四十歳）
- ⑥ 「讃州神光寺銅鐘銘」（巻六、延宝六年（一六七八）四十歳）
- ⑦ 「予洲三角寺銅鐘銘」（巻六、延宝八年（一六八〇）四十二歳）
- ⑧ 「撰州天満郷太融寺銅鐘銘」（巻六、延宝九年（一六八一）四十三歳）
- ⑨ 「讃州鶴足郡万恒寺銅鐘銘^{并叙}」（巻六、天和二年（一六八二）四十四歳）
- ⑩ 「武州豊島郡湯島郷宝林山靈雲寺銅鐘銘」（巻七、元禄四年（一六九一）五十三歳）
- ⑪ 「相州大住郡高森里八幡宮銅鐘銘」（巻七、元禄九年（一六九六）五十八歳）
- ⑫ 「武州豊島郡練馬村金乗院鉅鐘銘」（巻七、元禄十二年（一六九九）六十一歳）

- ⑬ 「相州大住郡田原邨徳石山道明寺銅鐘銘^{并序}」（巻七、元禄十二年（一六九一）六十一歳）

以上のごとくであるが、寛文十年（一六七〇）三十二歳の時に撰述した①「頭陀寺^{并序}」がもっとも初期のものである。時期的に近いものも多く、浄厳の撰文の需要がそれだけ高かったであろうことをものがたっており、それはまた浄厳和尚の交友関係を紐解く貴重な資料であるといえるだろう。なお右のうち、①頭陀寺は静岡県浜松市の真言宗の古刹で山号は吉林山。ここに収録された頭陀寺の梵鐘銘は、寛文十年の秋に同寺千手院住持有昌の請によって撰文したものである。③龍泉寺は大阪府富田林市の真言宗の古刹で山号は牛頭山。④牛頭山極楽密寺長徳院銅鐘銘は題名がないので仮に置いた。極楽密寺長徳院（現香川県丸亀市）は銘文中に「讃州塩飽牛島」とある。⑨万恒寺の銅鐘は、現在は高松市の養福寺に所蔵されている。

2 百字真言鐘

浄厳の撰文を有する梵鐘の特色は、乳の間と池の間を五区に分け、乳の間に百字の真言を陽鑄し、池の間に銘や由来などを陰刻する「百字真言鐘」形式である。この形式は浄厳和尚の創案といわれる。巻七に収録されている「武州豊島郡湯島郷宝林山靈雲寺銅鐘銘」を靈雲寺に現存する銅鐘銘の行取りによって示してみよう。

武州豊島ノ郡湯島ノ郡宝林山靈雲寺銅鐘銘

武都ノ北郊ニ有ニ勝地一、四野廓落、四方ノ之衆、易ニ来テ而投シ、一丘崛起、一天ノ之星、可ニ坐而算ヘ、菅祠良ノ聳、神鬼常ニ作ニ擁衛、土峯坤ニ峙、靈祇遙ニ為ニ鎮護、東叡天沢後聯、鐘梵互ニ和ス、都城聖堂前ヘ屹、旭ノ暉相ヒ映ス、実ト武野ノ之甲区者ヘ也、從四位下柳羽州源ノ保明公ヘ者、

幕府ノ侍臣也、天生篤愨ニシテ、忠孝是務ム、在公ニ之暇、嚮ニカフ志ヲ真乗ニ、常ニ歎世季ニ俗漓シテ、奉レ仏ニ之徒、不レ拘ヘ戒撿、以故ヘニ象教徒ニ設ケテ無キコトヲ益、因ニ啓ニ幕府ニ、望ミ請ニ伽藍之地、以嘱ニ貧道、遂使今茲仲秋ノ之二十一、

大將軍下シテ旨賜ヒ許ススノ攸、予乃チ夷榛莽卒ニ翔ニ宮構、遐邇競ニ趨縉白佐助ス、自ニ閏八ノ初二始メ斧ヲ、以至ニ孟冬ノ之半、土木ノ之績倏爾告レ成、從四位下牧野備後ノ刺史源成貞公ヘ者、

時ノ之股肱ナリ也、覽ニ而有感、喜捨シテ家貲、命ニ于鼻氏ニ鎔ニ成ニ鉦鐘、復令三工匠ヲシテ、締ニ造ニ其ニ樓、今月初四、樓鐘偕ニ就、以惟斯寺ノ之興起スルコトハ也者、本是大將軍ノ之賜ニシテ、而ニ公ノ醇信ノ之所ナリ致ス也、欲レ使下ノコトヲ後生ヲシテ有感ニルコト于茲、欽遵ニ仏制、力メテ荷教法、上ニ以テ禱ニ

台運ノ無疆、下ニ以テ増中、士民ノ寿福也、乃為レ銘曰、

城北ノ福庭 山号ニ宝林

元帥資地 実ニ比ニ布金

作夫四集 役工日ニ臨

弥ニ歴ニ七旬 棟宇成ス森

「(一区)」

牧野備公ハ 作ニ時ノ股肱ニ
命シテ工ニ為レラシム器 侈弁合レ程ニ
架レテ樓ヲ突兀 效シテ響ヲ鏗鉤
賢聖畢ニ萃 龍鬼熟醒ム
声ニ雖ニ一本有ニナリト 乍ニ起シ乍ニ滅ス
迷ニ夫ノ天真ニ 妄ニ作ニ分別
円レカニシテヲ融レ相ヲ 誰ニ縛ニ誰ニ絛
法音遍ニ益 何ソ有ニ垠垠
元祿第四歲次ニ辛未ニ季冬十有三日
開山苾芻東寺ノ末裔淨嚴欽テ誌ス

「(五区)」

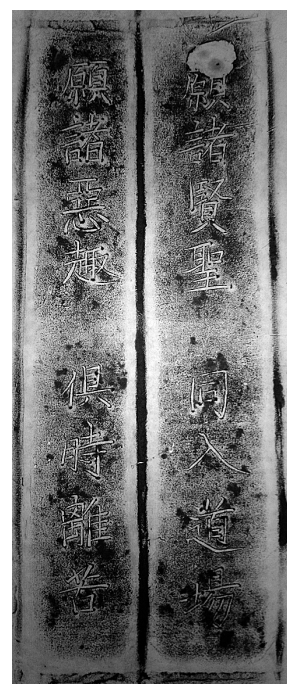
「(二区)」

淨嚴が元祿四年に創建した靈雲寺の右の銅鐘銘は、まさに「靈雲寺縁起」と称するに相応しいもので、靈雲寺が幕府の祈願所として創建され、国家の鎮護を期されていたこと、靈雲寺の地のこと、また將軍と柳沢吉保の力により創建されたこと、牧野備後守による鐘と鐘樓の寄進に対する謝辞を述べた内容になっており、その音色はまことに妙音であったと記されている。そしてこれが正統な淨嚴流の様式と定義される「百字真言鐘」なのである。

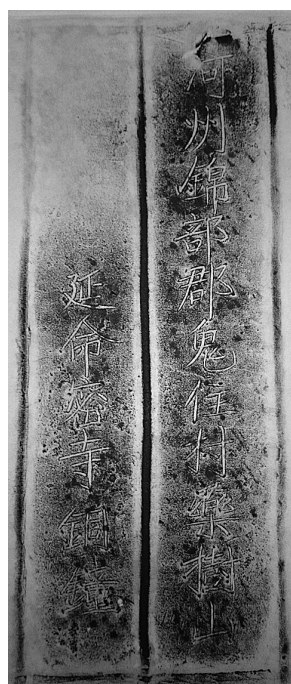
3 如法道場に響く妙音

ここに四紙の拓本がある。故収集家から譲られたものであるが、その中の一紙に「河州錦部郡鬼住村葉樹山延命密寺銅鐘」とあることから、淨嚴が俗宅を寺に改変して、自らが提唱した如法真言律の道場とした葉樹山延命寺の銅鐘銘と知れる。延命寺長老上田靈城師より、「現在の延命寺の梵鐘銘ではなく、おそらくは第二次世界大戦で失った延命寺の旧梵鐘である」との御教示をいただいた。上田師は焼け野原の中、鐘が集められた中を必死に探し回られ、なんとか見つけ出そうとされたが、師の願いは叶わなかったと語って下さった。四紙の内容は以下の通りである。

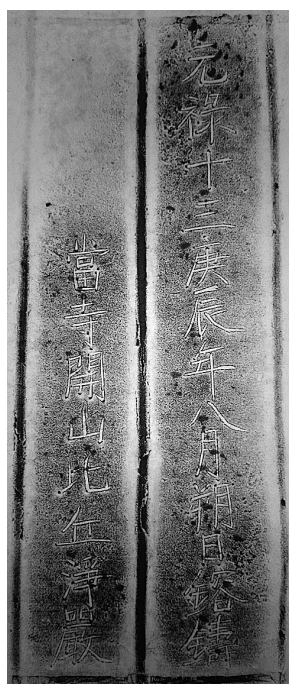
「(四区)」



①
願諸賢聖 同入道場
願諸惡趣 俱時離苦



②
河州錦部郡鬼住村葉樹山
延命密寺銅鐘



③
元禄十三庚辰年八月朔日銘鑄
當寺開山比丘淨嚴



幹縁比丘祥光
治師同郡上田村田中徳左衛門宗秀

右の四紙の拓本は、浄嚴の提唱した百字真言鐘の銘文の一部に違いなく、そのほんの一部ではあるが、延命寺という寺の性格を雄弁にものがたっているように思われる。すなわち、霊雲寺の梵鐘銘が幕府の祈願所としての草創を語るのに対し、この銘文は延命寺が浄嚴の提唱した如法真言律の道場としての性格が強く打ち出されているようである。延命寺を興法利生の道場としたいという願いは、父道雲自筆の如意輪観音に奉った願文が伝えられているように、浄嚴が少年期から期待されていたことであつた。道雲の願いを実現した浄嚴は、俗宅の地に結んだ如海庵を延命寺へと変えてゆく。元禄十三年（一七〇〇）三月七日に延命寺食堂衆寮の改築が成り、本堂落成となつてのことから、この梵鐘の制作も、一連の延命寺整備の流れの一つといえよう。

幹縁比丘を担った慧球祥光（一六六七―一七〇一）は、貞享の頃、浄嚴が東都に遊化のおり、霊雲寺二代となつた慧光等とともに膝下に参じ、元禄四年霊雲寺創業の時に当って知事となつた。このころ相州鎌倉一乗院を主席すると、浄嚴の命により、河南鬼住に帰り惟宝蓮体とともに延命寺を幸じた。蓮体とともに河南における嚴門の双璧として期待されるも、惜しみてあまりあるかな、梵鐘を銘鑄した翌年の元禄十四年六月二十五日、三十五歳で遷化した。

元禄十三年は浄厳にとって西は延命寺の整備が相成り、東は霊雲寺経営が軌道に乗り、幕府の信任はいよいよ厚く、江戸における和尚の心血を注いだ教化がようやく実を結び始めた時期であった。『徳川実紀』によってみれば、二月十一日、三月十八日には登城して綱吉の易講を聴き、五月二十七日には綱吉の命により柳沢保明の病氣平癒の祈禱をし、十七日間毎時三時に愛染法を修して靈験があったと記されている。

このころの浄厳の心中を推察できる一通の書状が伝えられている。元禄十三年十月二十三日付の「如海性寂宛覚彦消息」(延命寺蔵)である。契沖のあとをうけて妙法寺住職となった浄厳門下の如海へ宛てた、和尚の晩年の様子が知れる一通である。浄厳はこの中で繰り返し自らを「愚老」「老僧」と称し、「惟宝(蓮体) 次ハ戒琛(慧光)、如此次第仕ルカ、次第も好ク候、願クハ愚老早ク退隠仕、延命へ参度候へとも、定而左様ニハ難成候んと存候、当度出羽殿病氣祈禱之時も慇ニ靈験速ニ候故愈退隠可難成と存候」と記している。この文面より、浄厳は弟子達に託す道筋をつけてはいたものの、幕府の信任が日に日に強くなっていく中で、浄厳の脳裏にいつも思い浮かぶのは、遠く河内の自身が創建した如法真言律の「道場」である延命寺であった。帰りたいと願ってはいたけれど、同時に帰れないことも悟っていた。そうしたところに、右の延命寺の梵鐘の銘を記した浄厳は、父道雲が如意輪観音に託した興法利生の、自らが提唱した如法真言律の「道場」という言葉に万感の思いをこめて記したのである。誰よりも「道場」に入りたかったのは浄厳自身であっただろうと、この梵鐘銘の拓本が伝えているように思われるのである。

(寺津)

〔追記〕

翻刻文の素稿はすべて寺津が作成し、関口が監修した。なお画像処理等に岩城佑希(大学院生活機構研究科生活文化研究専攻一年)・岡本夏奈(日本語日本文学科四年)・恩田寛子(歴史文化学科三年)三氏の助力を得た。

【翻刻凡例】

- 1 妙高山靈光寺所蔵『妙極堂遺稿』(写本、全七冊)の第二冊目卷之二を翻刻する。渋茶色紙表紙、袋綴装、縦二七二mm・横一八二mm。
- 2 原則として通行の文字表記を用いて翻刻した。
- 3 行取・清濁・誤字・宛字は底本のままに翻刻し、改丁は「②01オのように示した。
- 4 踊字・繰返符号は二字分までは底本のままとし、それ以上は通行の表記に改めた。
- 5 訂正・後補等の指示があるときはそれに従い、本文中に後補挿入した文字には、「妙」のように傍点を付した。
- 6 韻文には適宜空格を施した。
- 7 判読不能の箇所は□で示した。
- 8 後人の書入れは翻刻しなかった。



「
②表表紙

妙極堂遺稿卷之二

侍者僧某等編錄

承應二癸巳年行年十五

五言長篇

夏日會客

夏日朋儕至烹茶降睡魔咨詢爾靜室風景其如何
春有桺花盛山環擁翠螺清湖水方滿魚躍翻新荷
細雨棹千顆黃雲麥兩坡黑甜北窓下一枕夢南柯
家向嶺頭在路從樵徑過踏青閑步穩對月夜吟多
談話詩兼道勝遊獨可誇

妙極堂遺稿卷之二

侍者僧某等編錄

承應二癸巳年行年十五

五言長篇

夏日會客

夏日朋儕至烹茶降睡魔咨詢爾靜室風景其如何
春有桺花盛山環擁翠螺清湖水方滿魚躍翻新荷
細雨棹千顆黃雲麥兩坡黑甜北窓下一枕夢南柯
家向嶺頭在路從樵徑過踏青閑步穩對月夜吟多
談話詩兼道勝遊獨可誇

「②表紙見返

「②01才

聯句 偶作

秋臻殘暑退，雨歇秀峯生。塞靜狼煙斷，天高雁陣橫。
望江看旅艇，下閣叩神鉦。菊折金鈴掛，荷枯翠蓋傾。
勝遊四美具，嘉會二難并。只持錫兼鉢，不關利與名。
出林聞鵲鵲，避火育鷄鶩。荻戰湖鬚冷，葉辭山骨呈。
女梭飛嘍々，樵斧響丁丁。說野駕吾馬，陟丘采彼蟲。
尋幽扶竹杖，真味在藜羹。樽畔斟魯酒，鍋中煎果英。
悠揚唵院落，兀坐對簷楹。待客事遲步，喚童促早行。
雪埋寒樹短，霜降暗香榮。雀怨棄捐急，鳥升品物亨。
舞裙飾月穩，落絮逐風繁。滿眼低摧盡，忘懷氣味清。

聯句 偶作

秋臻殘暑退，雨歇秀峯生。塞靜_{ニシテ}狼煙斷，天高_{シテ}雁陣橫。
望_レ江看_レ旅艇，下_レ閣叩_二神鉦_一。菊折_テ金鈴掛_リ，荷枯_テ翠蓋傾_ク。
勝遊四美具，嘉會二難并。只持_二錫兼鉢_一，不_レ關_二利與名_一。
出_レ林聞_二鵲鵲_一，避_レ火育_二鷄鶩_一。荻戰湖鬚冷，葉辭山骨呈。
女梭飛嘍々，樵斧響丁丁。說野駕_二吾馬_一，陟丘采_二彼蟲_一。
尋幽扶_二竹杖_一，真味在_二藜羹_一。樽畔斟魯酒，鍋中煎果英。
悠揚唵院落，兀坐對簷楹。待客事遲步，喚童促早行。
雪埋寒樹短，霜降暗香榮。雀怨棄捐急，鳥升品物亨。
舞裙飾月穩，落絮逐風繁。滿眼低摧盡，忘懷氣味清。

蒙恬初製筆，田氏議分荊。法密干戈罷，音遙砧杵鳴。
岸頽帶紅霧，霞簇映朱甍。枕石駭鄉夢，掬泉解宿醒。
粧眉誇婀娜，掩面悼孤惺。羯鼓忽傳曉，紙帳已識明。
頡頏鬧巢燕，宛展語流鶯。重疊嶂千里，渺茫踞幾程。
士闡皆險陽，他國自屏營。搖蕩禾黍紛紜多蔓菁，
空陰捲蓬箔，夜久試燈檠。移榻偶然立，讀書學業精。
翩翻園蝶去，鼻息屋雷轟。岩溜時滴瀝，邊疆日泰平。
鋪毡豪傑賑，揮筆鬼神驚。列當猿鶴噪，廣街螻蟻盈。
吹簫舒困意，聯句遣閑情。李杜為敏憶，蘇黃有細評。
變容談棒喝，把手結詩盟。庭柳似眠_起晚桃如畫成。

蒙恬初製筆，田氏議分荊。法密干戈罷，音遙砧杵鳴。
岸頽帶紅霧，霞簇映朱甍。枕石駭鄉夢，掬泉解宿醒。
粧眉誇婀娜，掩面悼孤惺。羯鼓忽傳曉，紙帳已識明。
頡頏鬧巢燕，宛展語流鶯。重疊嶂千里，渺茫踞幾程。
士闡皆險陽，他國自屏營。搖蕩禾黍紛紜多蔓菁，
空陰捲蓬箔，夜久試燈檠。移榻偶然立，讀書學業精。
翩翻園蝶去，鼻息屋雷轟。岩溜時滴瀝，邊疆日泰平。
鋪毡豪傑賑，揮筆鬼神驚。列當猿鶴噪，廣街螻蟻盈。
吹簫舒困意，聯句遣閑情。李杜為敏憶，蘇黃有細評。
變容談棒喝，把手結詩盟。庭柳似眠起，晚桃如畫成。

世間珍化蝶樓角吼華鯨作過依心醉得羞因良輕
佳人笑顏彩農老擔肩頰芳徑蜂惹恨荒畦鳩勸耕
青巾漱溪壑白紵賞春晴一葦縱漢水百花漫洛城
藏鈎將舊歲繙曆賀元正稱目還稱意斷魂重斷腸
匡床宜致案涼殿耐圍枰侯思喫餅黃門誣蔗餚
放焉沈汨瀾歸矣隱蓬瀛魚躍漁灣淺雞呼禪戶扁

題金剛山并序

和國多奇山而其所尊崇者金剛山耳此金剛山者
法起菩薩常在說法之靈地也言其貴兮貴踰普陀
言其高過華岳加之關々黃鳥自慰山僧之情片片

白雲更遮樵人之眼窓接啼猿樹石飛浴鶴泉松杉
葱鬱侵青漢樓閣玲瓏味白雲疊嶂千重危崖萬仞
麒麟出鳳皇來古木戟離巨石龜伏峯巒蜿蜒如龍
臥門廡邃深似仙居誠是裘曇說法慧遠翻經處者
乎哉緇徒傳宗兮海涵岳鎮心法授受兮匪求諸外
汜德至矣天盡不得地載不得鑽之弥堅仰之弥高
上透於霄漢下徹于黃泉是厥道者乎哉來學恍々
而有續其緒焉余一見此名藍凝思寓目既書之復
申之以詩一篇略旌緒餘云尔

扶桑屹立金剛山名利上方離市闌鈴響鐸々鳴佛

世間珍化蝶樓角吼華鯨作過依心醉得羞因貌輕
佳人笑顏彩農老担肩頰芳徑蜂惹恨荒畦鳩勸耕
青巾漱溪壑白紵賞春晴一葦縱漢水百花漫洛城
藏鈎將旧歲繙曆賀元正稱目還稱意斷魂重斷腸
匡床宜致案涼殿耐圍枰侯思喫葱餅黃門誣蔗餚
放焉沈汨瀾歸矣隱蓬瀛魚躍漁灣淺雞呼禪戶扁

題金剛山并序

和國多奇山而其所尊崇者金剛山耳此金剛山者
法起菩薩常在說法之靈地也言其貴兮貴踰普陀
言其高過華岳加之關々黃鳥自慰山僧之情片片

白雲更遮樵人之眼窓接啼猿樹石飛浴鶴泉松杉
葱鬱侵青漢樓閣玲瓏味白雲疊嶂千重危崖萬仞
麒麟出鳳皇來古木戟離巨石龜伏峯巒蜿蜒如龍
臥門廡邃深似仙居誠是裘曇說法慧遠翻經處者
乎哉緇徒傳宗兮海涵岳鎮心法授受兮匪求諸外
汜德至矣天盡不得地載不得鑽之弥堅仰之弥高
上透於霄漢下徹于黃泉是厥道者乎哉來學恍々
而有續其緒焉余一見此名藍凝思寓目既書之復
申之以詩一篇略旌緒餘云尔

扶桑屹立金剛山名利上方離市闌鈴響鐸々鳴佛

殿鐘聲殷々透禪關
樵從綠樹繁陰出
僧自白雲深處還
清淨空虛是非外
林間石淺水潺湲

代清水村喜兵衛作為愛子第七年忌追福詩

并序

夫人世如逝水壽命似朝露
槿花待陽萎雲霧隨風散
世上假相轉變如此豈作有執之思乎哉
維時承應二歲首夏初七
冀當愛子道正禪定門第七年忌
設一座之齋會以資薦冥福
亦別綴野偈二篇恭充拈香之頌
伏冀因此善利亡子之靈與群類之魂渡生死之海到涅槃之岸也矣

其一

浮雲歲月易推遷
愛子一喪泊七年
且喜因斯追善力
平安打坐紫金蓮

其二

人間萬事摠無常
憶得昔年淚濕裳
趣向樂城何物是一盂淡飯一爐香

觀山水序并詩

粵誅茅薪宅于南山之南
落霞孤鶩明月清風其山水之景誠可愛焉
時當無為之暇日舊友交至相對談禪論詩益加以山水之槃虞也矣
竹杖芒鞋得々

殿鐘聲殷々透禪關
樵從綠樹繁陰出
僧自白雲深處還
清淨空虛是非外
林間石淺水潺湲

代清水村喜兵衛作為愛子第七年忌追福詩

并序

夫人世如逝水壽命似朝露
槿花待陽萎雲霧隨風散
世上假相轉變如此豈作有執之思乎哉
維時承應二歲首夏初七
冀當愛子道正禪定門第七年忌
設一座之齋會以資薦冥福
亦別綴野偈二篇恭充拈香之頌
伏冀因此善利亡子之靈與群類之魂渡生死之海到涅槃之岸也矣

其一

浮雲歲月易推遷
愛子一喪泊七年
且喜因斯追善力
平安打坐紫金蓮

其二

人間萬事摠無常
憶得昔年淚濕裳
趣向樂城何物是一盂淡飯一爐香

觀山水序并詩

粵誅茅薪宅于南山之南
落霞孤鶩明月清風其山水之景誠可愛焉
時當無為之暇日旧友交至相對談禪論詩益加以山水之槃虞也矣
竹杖芒鞋得々

而來先視山頂更有青松嶙峋駭遊人之眼⁵還望江
上亦有水鳥游泳驚波底之魚矣佳景浩々終無窮
矣相與携玄山好禾之飯以備山水之饌又添以張
公大谷之梨梁侯鳥樺之柿房陵朱仲之李洞庭負
霜之橘仇池連帶之椒周文弱之棗五木之精巨房
之大栗及以芋魁鴈啄丹若黑檣胡柑等林間拾薪
以煎雙井顧渚之茶我亦踰盧仝喫八九碗碧苔為
氍毹睡不易眠遂櫂小船遶江歷覽平洲杜若清香
風遞紛紛畫帆之邊古岬蕙蘭冷蘂鷗弄片々蒼波
之上⁶一行新遊戲芦荻之裡兩三宿驚逍遙萬蘊之

中少焉東山漸明月出絕岫之間風好浪靜勝遊無
涯也矣及夜將半時余語于客曰此會難又相與賦
詩具山水之遊興矣客喜而且笑曰斯言最善遂賦
一篇

片帆高掛白雲邊明月照膽自皎然相對夜深波浪
靜一聲新雁唳長天

余曰吾亦賦一篇以酬汝之詩遂曰

月入孤舟銀漢晴出超物外獨分明家山回視何處
是萬頃茫々一掌平

余曰遊已滿矣詩已成矣興猶未盡矣飯去來兮夜

而來先視山頂更有青松嶙峋駭遊人之眼⁵還望江
上亦有水鳥游泳驚波底之魚矣佳景浩々終無窮
矣相與携玄山好禾之飯以備山水之饌又添以張
公大谷之梨梁侯鳥樺之柿房陵朱仲之李洞庭負
霜之橘仇池連帶之椒周文弱之棗五木之精巨房
之大栗及以芋魁鴈啄丹若黑檣胡柑等林間拾薪
以煎雙井顧渚之茶我亦踰盧仝喫八九碗碧苔為
氍毹睡不易眠遂櫂小船遶江歷覽平洲杜若清香
風遞紛紛畫帆之邊古岬蕙蘭冷蘂鷗弄片々蒼波
之上⁶一行新遊戲芦荻之裡兩三宿驚逍遙萬蘊之

中少焉東山漸明月出絕岫之間風好浪靜勝遊無
涯也矣及夜將半時余語于客曰此會難又相與賦
詩具山水之遊興矣客喜而且笑曰斯言最善遂賦
一篇

片帆高掛白雲邊明月照膽自皎然相對夜深波浪
靜一聲新雁唳長天

余曰吾亦賦一篇以酬汝之詩遂曰

月入孤舟銀漢晴出超物外獨分明家山回視何處
是萬頃茫々一掌平

余曰遊已滿矣詩已成矣興猶未盡矣飯去來兮夜

將曉矣自棹小船而飯曉來記得晚來踞殿々鐘聲
度嶺頭客亦同飯行樂二三日而去焉

寶篋印塔銘并序

原夫良永大德對州人也不詳姓氏相傳武將之末
卯歲絕類離群或時上於南紀望山精探密教傳誦
經典逮閱遺教經欲入律宗之意起而不已矣行年
三十有三蓋當慶長十有五年庚戌而後下對州就
俊性律師需沙弥戒三十有五受戒竭底焉再興野
山真別處以為律院住此三十歲矣既出閭里化衆
不知幾萬人也每其所至無不仰瞻可謂千歲豪傑

將曉矣自棹小船而歸曉來記得晚來踞殿々鐘聲
度嶺頭客亦同歸行樂二三日而去焉

寶篋印塔銘并序

原夫良永大德對州人也不詳姓氏相傳武將之末
卯歲絕類離群或時上於南紀望山精探密教傳誦
經典逮閱遺教經欲入律宗之意起而不已矣行年
三十有三蓋當慶長十有五年庚戌而後下對州就
俊性律師需沙弥戒三十有五受戒竭底焉再興野
山真別處以為律院住此三十歲矣既出閭里化衆
不知幾萬人也每其所至無不仰瞻可謂千歲豪傑

百世導師矣化緣已盡七十歲上宮太子之廟所在
轉法輪寺而逝昔正保四年六月初六日也今承應
二年當第七年忌道俗舉村為報恩德建寶篋印之
石塔也彼經云若有有情能於此塔一香一花禮拜
供養八十億劫生死重罪一時消滅又云若人暫見
是塔一切災難其處亦無人馬六畜童子童女疫癘
之患厥功德大如此矣仍求銘於余不得敢辭粗述
厥緒餘

律師良永德溢八埏度生濟衆普施福田雄風凜々
智淵涓々頓弁迷悟明分聖賢化緣既盡氣息奄然

百世導師矣化緣已盡七十歲上宮太子之廟所在
轉法輪寺而逝時正保四年六月初六日也今承應
二年當第七年忌道俗舉村為報恩德建寶篋印之
石塔也彼經云若有有情能於此塔一香一花禮拜
供養八十億劫生死重罪一時消滅又云若人暫見
是塔一切災難其處亦無人馬六畜童子童女疫癘
之患厥功德大如此矣仍求銘於余不得敢辭粗述
厥緒余

律師良永德溢八埏度生濟衆普施福田雄風凜々
智淵涓々頓弁迷悟明分聖賢化緣既盡氣息奄然

弟子檀越涕泣堪咽仰天俯地愁莫大焉而今者則
繫第七年造寶篋塔建之陌阡夫塔神力不可備甄
庶仁者等勵志勉旃冀因此利村裡無惰萬姓快樂
一人安全紹隆佛法國家平々

題碧岩錄講演

即此目前最上乘懸河妙辯震雷轟一言吐露碧岩
錄引入真空跋與盲

再和惟岳雅公韻

惟岳雅公講演碧岩錄予亦預其衆仍而率尔述拙
詩一篇呈上公以要斧鑿之更詳之見滌濯滓穢

弟子檀越涕泣堪咽仰天俯地愁莫大焉而今者則
概第七年造寶篋塔建之陌阡夫塔神力不可備甄
庶仁者等勵志勉旃冀因此利村裡無惰萬姓快樂
一人安全紹隆佛法國家平々

題碧岩錄講演

即此目前最上乘懸河妙辯震雷轟一言吐露碧岩
錄引入真空跋與盲

再和惟岳雅公韻

惟岳雅公講演碧岩錄予亦預其衆仍而率尔述拙
詩一篇呈上公以要斧鑿之更詳之見滌濯滓穢

還蒙忝和拙韻被惠于余矣余拜而受之披閱之則
文鋒電馳矣筆勢風生矣絺句繪章終日寫同寓心
不能窮其之根柢焉喻如欲以一掌堙江河漚矣然
而公之殷勤之至不可不奉再和故不顧以蠡測
海持管窺天之譏漫述一篇再和之云尔
前藻殷勤和卑韻雄文總似象車轟清辭妙句有深
趣終日吟環困欲盲

和遊山寺之韻

斯處足賞景豈可向外求和韻追子美句句敵蘇易
殷々踈鐘響更無一點愁枰欄散幽徑松檜羅古丘

還蒙忝和拙韻被惠于余矣余拜而受之披閱之則
文鋒電馳矣筆勢風生矣絺句繪章終日寫同寓心
不能窮其之根柢焉喻如欲以一掌堙江河漚矣然
而公之殷勤之至不可不奉再和故不顧以蠡測
海持管窺天之譏漫述一篇再和之云尔
前藻殷勤和卑韻雄文總似象車轟清辭妙句有深
趣終日吟環困欲盲

和遊山寺之韻

斯處足賞景豈可向外求和韻追子美句句敵蘇易
殷々踈鐘響更無一點愁枰欄散幽徑松檜羅古丘

伴月吟驢穩晚林宿鳥投各自勤心修緇素不同謀

除夕

列炬藏鉤夜幾更忽聞爆竹兩三聲任他今歲留不住來春相待到天明

又

駸々歲月去如梭露往霜過豈可遮十有餘年一炊夢言々句句耐咨嗟

又

爆竹聲乾三四更匡床坐睡夢魂驚須臾便是來春事終夜斷腸對短檠

伴月吟驢穩晚林宿鳥投各自勤心修緇素不同謀

除夕

列炬藏鉤夜幾更忽聞爆竹兩三聲任他今歲留不住來春相待到天明

又

駸々歲月去如梭露往霜過豈可遮十有餘年一炊夢言々句句耐咨嗟

又

爆竹聲乾三四更匡床坐睡夢魂驚須臾便是來春事終夜斷腸對短檠

呈上老師小簡

某頓首再拜謹啓離絕以來屢淹星鳥音信杜口公德滋久矣二六時中行住坐臥不為病患所侵否某雖託居僻境千失之中不無一得焉頃於觀心寺親陪碧岩講演之席近聞涅槃妙心之譚仍而倉卒述拙篇一首呈上岳公公見和而惠于余也矣余又再和三闕之詩且書附使矣予遠思長想恰如鼎旌勞心懣々非筆墨之所能陳寫焉伏望嚴冬寒氣發逼肌千萬自愛不宣

呈上老師小簡

某頓首再拜謹啓離絕以來屢淹星鳥音信杜口公德滋久矣二六時中行住坐臥不為病患所侵否某雖託居僻境千失之中不無一得焉頃於觀心寺親陪碧岩講演之席近聞涅槃妙心之譚仍而倉卒述拙篇一首呈上岳公公見和而惠于余也矣余又再和三闕之詩且書附使矣予遠思長想恰如鼎旌勞心懣々非筆墨之所能陳寫焉伏望嚴冬寒氣發逼肌千萬自愛不宣

承應三甲午年 行年十六

歲旦試毫三首

其一

喜氣滿東欄 春容自一般 更無椒栢酒 何用韭蔥盤
瑞靄罩朝日 祥雲鎖翠巒 書詩吹硯處 新旦入毫端

其二

黃鶯催我一何頻 氣轉鴻鈎萬戶新 吹面東風寒尚在
露結作鉤箔上銀

其三

承應三甲午年 行年十六

歲旦試毫三首

其一

喜氣滿東欄 春容自一般 更無椒栢酒 何用韭蔥盤
瑞靄罩朝日 祥雲鎖翠巒 書詩吹硯處 新旦入毫端

其二

黃鶯催我一何頻 氣轉鴻鈎萬戶新 吹面東風寒尚在
露結作鉤箔上銀

其三

暖靄輕籠四面山 黃鶯百轉語林端 日長春院無他
事 獨向爐邊泛月團

春日四首

滿庭紅白鬬芳菲 黃蝶守枝晝懶飛 若使王孫遊此
處 金鞍玉勒自忘歸

又

寺樓倒影欲黃昏 獨對庭花掩草門 寂寞春心無處
托 金衣公子柳邊翻

又

芒屨竹杖尋花來 行遍山椒與水涯 澗約東邊古叢

暖靄輕籠四面山 黃鶯百轉語林端 日長春院無他
事 獨向爐邊泛月團

春日四首

滿庭紅白鬬芳菲 黃蝶守枝晝懶飛 若使王孫遊此
處 金鞍玉勒自忘歸

又

寺樓倒影欲黃昏 獨對庭花掩草門 寂寞春心無處
托 金衣公子柳邊翻

又

芒屨竹杖尋花來 行遍山椒與水涯 澗約東邊古叢

裡和雲浥雨數枝開

又

路入雲煙盡日迷
翠微深處亂鶯啼
漱流枕石飛泉下
只見鉤船逆上谿

山行

山溪踏遍成何事
寂寞野花傍翠岩
松下呼童對烹茗
數聲黃鳥伴清譚

山堂夜坐

山堂夜景十分濃
庭逕無人花影重
月入虛廊不成睡
坐聽一百八聲鐘

裡和雲浥雨數枝開

又

路入雲煙盡日迷
翠微深處亂鶯啼
漱流枕石飛泉下
只見鉤船逆上谿

山行

山溪踏遍成何事
寂寞野花傍翠岩
松下呼童對烹茗
數聲黃鳥伴清譚

山堂夜坐

山堂夜景十分濃
庭逕無人花影重
月入虛廊不成睡
坐聽一百八聲鐘

春寒二首

東風剪剪透羅幃
春景如冬雪欲飛
燕子掠泥歸去晚
寒煙罩柳自依稀

春晴

獨坐賞春晴不須酌酒觥
嶺頭花一色竹外鶯千聲
岸遠布帆急風和柳絮輕
何時得斯景杖屨稱閑行

期友人見訪

疎松晚景路三叉
吠犬守籬只一家
明日尋幽來溪上山童相對摘香芽

過山寺

春寒二首
(抹消)

東風剪剪透羅幃
春景如冬雪欲飛
燕子掠泥歸去晚
寒煙罩柳自依稀

春晴

獨坐賞春晴不須酌酒觥
嶺頭花一色竹外鶯千聲
岸遠布帆急風和柳絮輕
何時得斯景杖屨稱閑行

期友人見訪

疎松晚景路三叉
吠犬守籬只一家
明日尋幽來溪上山童相對摘香芽

過山寺

山寺寂寥青晝長
獨携步履遶虛廊
落花流水無人處
終日閑吟淚萬行

呈了阿雅公

雨後千山綠於藍
爛熳石竹遶堦南
自携苔帚掃庭砌
驀地風來振檜杉

贈百合草花了阿雅公

此箇草花聲價高山
踏遍不辭勞
請君試向窓前見
窈窕紅姿頗入騷

山居

卜居重疊碧峯巔
矧復清和四月天
躑躅盈担歸去

晚行看西日沒蒼煙

夜興

明月一輪掛碧天
蛙鳴鴉噪思凄然
山亭寂寞多風景
棋子和雲落檻前

初秋

一片落梧暑未降
飆然西吹入軒窓
眼前物色無人識
獨倚瘦藜過石缸

山居

危樓依嶂白雲深
澗水如藍縈竹林
終日看書情不厭
獨凭欄角數歸禽

山寺寂寥青晝長
獨携步履遶虛廊
落花流水無人處

終日閑吟淚萬行

呈了阿雅公

雨後千山綠於藍
爛熳石竹遶堦南
自携苔帚掃庭砌
驀地風來振檜杉

贈百合草花了阿雅公

此箇草花聲價高山
踏遍不辭勞
請君試向窓前見
窈窕紅姿頗入騷

山居

卜居重疊碧峯巔
矧復清和四月天
躑躅盈担歸去

晚行看西日沒蒼煙

夜興

明月一輪掛碧天
蛙鳴鴉噪思凄然
山亭寂寞多風景
梅子和雲落檻前

初秋

一片落梧暑未降
飆然西吹入軒窓
眼前物色無人識
獨倚瘦藜過石缸

山居

危樓依嶂白雲深
澗水如藍縈竹林
終日看書情不厭
獨凭欄角數歸禽

閑居秋日

寂寞山房黃日朝，
黃葉隨風飄。村橋正有遠來客，
預掃柴門向火燒。

中秋

時惟中秋三五夕，
長空無翳一輪明。夜深蟋蟀鳴古砌，
牆角桂花影縱橫。

十六夜月

風飄玉露擺蓬蒿，
貪看雲端霜月高。莫道今宵一分缺，
古岩明處令猿號。

祖雲法公一日告別，
仍而岳叟作送行頌見寄。

閑居秋日

寂寞山房秋日朝，
紛紛黃葉隨風飄。村橋正有遠來客，
預掃柴門向火燒。

中秋

時惟中秋三五夕，
長空無翳一輪明。夜深蟋蟀鳴古砌，
牆角桂花影縱橫。

十六夜月

風飄玉露擺蓬蒿，
貪看雲端霜月高。莫道今宵一分欠，
古岩明處令猿號。

祖雲法公一日告別，
仍而岳叟作送行頌見寄。

之矣。予亦不得止賦詩一篇以餞之焉云尔。

秋晚山房落葉多，
不勝君去奈愁何。明朝若到繁華地，
寄語長空南鴈摩。

自播州明石浦有客來岳公之庵，
予偶預其席。客索詩於予，
予固辭矣。客猶請而不已，
予不得止，因以山房秋雨作之。

秋晚千山落葉飄，
竹房連日雨蕭蕭。野盤擎破新罇栗，
齋後寂寥意趣饒。

秋夜獨坐

四山才落倍愁情，
庭砌亦添蟋蟀鳴。坐到曉天無別

之矣。予亦不得止賦詩一篇以餞之焉云尔。

秋晚山房落葉多，
不勝君去奈愁何。明朝若到繁華地，
寄語長空南鴈摩。

自播州明石浦有客來岳公之庵，
予偶預其席。客索詩於予，
予固辭矣。客猶請而不已，
予不得止，因以山房秋雨作之。

秋晚千山落葉飄，
竹房連日雨蕭蕭。野盤擎破新罇栗，
齋後寂寥意趣饒。

秋夜獨坐

四山才落倍愁情，
庭砌亦添蟋蟀鳴。坐到曉天無別

事長空唯抱玉壺清

江居

自有江村風月清
芦灣屈曲水回縈
吾儂不受世間
事好與白鷗公結盟

田家雜興

山田稻熟秋將晚
枯草冒霜不復榮
菊斂幽庭午陰
轉真村時有經車鳴

夜

失枕忽然夢寐驚
起行殘月好風清
此時遊子應腸
斷去寺隔山鐘有聲

遣懷

終身願作水雲僧
名利縈華無所憑
明月滿襟不成
睡廬山屏下對殘燈

偶作

愁思似浮萍
無根還自生
試教談笑盡
胸宇豁然清

悼阿姉貞心信女

至大乎哉吾佛之設教也
一代時教五千餘藏或示
般若或設涅槃或告生者
必滅塵世無常以使迷倒
凡夫到于真空也矣
粵阿姉貞心信女頃罹病患
阿魚之疾醫療沒效遂隕厥身
矣豈圖紫蘭凋於帳幃

事長空唯抱玉壺清

江居

自有江村風月清
芦灣屈曲水回縈
吾儂不受世間
事好與白鷗同結盟

田家雜興

山田稻熟秋將晚
枯草冒霜不復榮
菊斂幽庭午陰
轉真村時有經車鳴

夜

失枕忽然夢寐驚
起行殘月好風清
此時遊子應腸
斷松寺隔山鐘有聲

遣懷

終身願作水雲僧
名利縈華無所憑
明月滿襟不成
睡廬山屏下對殘燈

偶作

愁思似浮萍
無根還自生
試教談笑盡
胸宇豁然清

悼阿姉貞心信女

至大乎哉吾佛之設教也
一代時教五千餘藏或示
般若或設涅槃或告生者
必滅塵世無常以使迷倒
凡夫到于真空也矣
粵阿姉貞心信女頃罹病患
阿魚之疾醫療沒效遂隕厥身
矣豈圖紫蘭凋於帳幃

玉樹枯于庭堦也予千針刺心兮百酸攪腸兮不堪
慨嘆惘然無措矣雖然如來誠諦之語會者定離之
理可默而止焉仍而述野偈一篇以充拈香之頌云
尔

浮世塵勞捐任捐親家相聚涕連々一拳々倒大千
界落月三更好打眠

書前詩贈友人

某頓首稽顙欽啓厥後音信絕却踈懶滋甚矣伏惟
玉體起居動止清佳無事否某比日翕忽乎焉失
于阿姊矣仍而草率述於亡悼之野頌一篇拙詞柔

納殆不可言也矣雖然公之天資敏捷而淵識矣
以可斧鑿於愚之庸謬也是故書而以付於便矣伏
希受納鄙言不敢拒却耳雕蟲之小技不足以紓于
下情矣

贈菊花與菊藏院主書

欲呈短札喜得好便伏惟玉體起居如何動靜無
恙否某比日少羅病患雖屢加治療賤疾得愈也矣
某之弊廬秋向晚而荒庭露溥矣偶今日破曉出於
舍而吟步矣幸而折得菊花一莖以附于便也矣元
亮東籬豈不以斯物為榮乎哉伏希公頌納鄙餽

玉樹枯于庭堦也予千針刺心兮百酸攪腸兮不堪
慨嘆惘然無措矣雖然如來誠諦之語會者定離之
理可点而止焉仍而述野偈一篇以充拈香之頌云
尔

浮世塵勞捐任捐親家相聚涕連々一拳々倒大千
界落月三更好打眠

書前詩贈友人

某頓首稽顙欽啓厥後音信絕却踈懶滋甚矣伏惟
玉體起居動止清佳無事否某比日翕忽乎焉失
于阿姊矣仍而草率述於亡悼之野頌一篇拙詞柔

納殆不可言也矣雖然公之天資敏捷而淵識矣
以可斧鑿於愚之庸謬也是故書而以付於便矣伏
希受納鄙言不敢拒却耳雕蟲之小技不足以紓于
下情矣

贈菊花與菊藏院主書

欲呈短札喜得好便伏惟玉體起居如何動靜無
恙否某比日少羅病患雖屢加治療賤疾得愈也矣
某之弊廬秋向晚而荒庭露溥矣偶今日破曉出於
舍而吟步矣幸而折得菊花一莖以附于便也矣元
亮東籬豈不以斯物為榮乎哉伏希公頌納鄙餽

不敢拒却矣此箇醜葩唯比擬于 公之淨刹耳

與了阿公求誨四書之句讀書

某啓即日薄寒伏惟 尊候萬福欣抃無極料 公
在閑窓寂寞之處博閱群書 蠅生 遍聞四書也者孔
門之領袖儒家之大綱也然而衲子也者欲內通三
學外挈五經洽精諸典虛利衆生也雖然如愚之庸
謬未詳句讀豈得能通厥理哉宓希 公誨愚四書
之句讀倘枉辱許可不能以報厚荷之恩區々之志
不得忘耳愧負千萬不罪不罪

悼三五郎少年呈金剛院主書并詩

野衲 空經 端肅頓首原夫真性幽寂遠超万象之城
聖智淵深迴出六趣之境展則彌綸法界收則不立
非髮是故口欲談而辭喪心歌緣而慮亡尔乃背之
則曠劫漂沈合之則殺那起越竊念我等罪障海深
業報山高何時脫出生死窠窟哉是以慧日出興西
天以說示涅槃之真理餘教流行東土為拔濟昏迷
之群品也種々方便不可勝數矣或說人命危脆如
風前燈塵世移變似水上泡其教弘矣其化偉矣粵
公之愛姪少年者性情敏捷強記駭人姿儀秀朗
神相感天可謂志氣貫虹霓操履潔冰雪者也不料

不敢拒却矣此箇醜葩唯比擬于 公之淨刹耳

與了阿公求誨四書之句讀書

某啓即日薄寒伏惟 尊候萬福欣抃無極料 公
在閑窓寂寞之處博閱群書蠅生遍聞四書也者孔
門之領袖儒家之大綱也然而衲子也者欲內通三
學外挈五經洽精諸典虛利衆生也雖然如愚之庸
謬未詳句讀豈得能通厥理哉宓希 公誨愚四書
之句讀倘枉辱許可不能以報厚荷之恩區々之志
不得忘耳愧負千萬不罪不罪

悼三五郎少年呈金剛院主書并詩

野衲 空經 端肅頓首原夫真性幽寂遠超万象之城
聖智淵深迴出六趣之境展則彌綸法界收則不立
非髮是故口欲談而辭喪心歌緣而慮亡尔乃背之
則曠劫漂沈合之則殺那起越竊念我等罪障海深
業報山高何時脫出生死窠窟哉是以慧日出興西
天以說示涅槃之真理余教流行東土為拔濟昏迷
之群品也種々方便不可勝數矣或說人命危脆如
風前燈塵世移變似水上泡其教弘矣其化偉矣粵
公之愛姪少年者性情敏捷強記駭人姿儀秀朗
神相感天可謂志氣貫虹霓操履潔冰雪者也不料

奄忽而羅斯荼毒也伏惟 公悲悼痛泣哀苦難堪
雖然逝者已矣追念何益庶幾深憶長悼不至傷損
矣予非不曾聞只愧羈縻紛冗引逮今日幸不見咎
焉仍而綴短章一篇以代于香奠云尔

靈鑑

塵勞消遣好安禪、只住人間十二年、說與分明那一
句、不離當處常湛然、

江亭偶作

江亭日將落、白鳥近窓前、喜有故人會、恨無好句聯、
可勤深密學、須識歲時遷、若達圓通境、塵勞不用蠲、

特請蒙十方檀越之助緣、再興河州錦部郡統
松屋之橋狀

伏惟物也者與人修廢人不修而其所以與者未有不
以廢矣其所廢者未有不與矣二者轉換猶如四
時有序寒暑迭行也已矣粵當處之橋者
前大樹秀忠公以天王寺建立之餘材再興之巡察
電馳役夫雲集直欄橫檻不日而成焉然而行人有
未雲見龍之喜厥后喪葛屢遷雨雪數侵無人修造
橋梁將折刺遭癸酉之秋洪水為害一時磨滅也矣
野山參詣之行人征馬涉水跼足之艱難不可勝言

奄忽而羅斯荼毒也伏惟 公悲悼痛泣哀苦難堪
雖然逝者已矣追念何益庶幾深憶長悼不至傷損
矣予非不曾聞只愧羈縻紛冗引逮今日幸不見咎
焉仍而綴短章一篇以代于香奠云尔

靈鑑

塵勞消遣好安禪、只住人間十二年、說與分明那一
句、不離當處常湛然、

江亭偶作

江亭日將落、白鳥近窓前、喜有故人會、恨無好句聯、
可勤深密學、須識歲時遷、若達圓通境、塵勞不用蠲、

特請蒙十方檀越之助緣、再興河州錦部郡統
松屋之橋狀

伏惟物也者與人修廢人不修而其所以與者未有不
以廢矣其所廢者未有不與矣二者轉換猶如四
時有序寒暑迭行也已矣粵當處之橋者
前大樹秀忠公以天王寺建立之余材再興之巡察
電馳役夫雲集、直欄橫檻、不日而成焉、然而行人有
未雲見龍之喜、厥后、喪葛屢遷、雨雪數侵、無一人修造
橋梁將折、刺遭癸酉之秋、洪水為害、一時磨滅也矣、
野山參詣之行人、征馬涉水、跼足之艱難、不可勝言

焉、予勵小志欲造此橋、雖然、錢囊底空、只吹塵耳、伏希、蒙十方縑素之施緣、再興之、以使行旅之人馬、無涉濟之苦也矣、吾佛如來說八福、以建造橋梁為其一焉、若人信如來之金口誠諦之語、於此橋施入一紙半錢者、成就現當二世之福田、誇無比之樂者也、仍而勸進趣如件、

夜雪二首

五更風冷夢魂驚、忽聽窓前竹有聲、試出柴門摩眼見、六花鋪玉滿庭明、

其二

冷颼吹雪透松牖、燈下殘經不忍看、活火煮茶將汲水、孤舟乘興落前灘、

冬夜憶南山

今年別業冷難禁、憶是南山應雪深、鴈擊長空風烈夜、月樓染筆欲傳音、

春日書懷

雲幕四圍鋪錦茵、江堤芳草碾雕輪、遲々暖日花留客、嫋々和風柳拂人、芟草童兼黃犢睡、樂漁士與白鷗親、野僧不管世間事、好向空山獨過春、

訪友不遇

焉、予勵小志欲造此橋、雖然、錢囊底空、只吹塵耳、伏希、蒙十方縑素之施緣、再興之、以使行旅之人馬、無涉濟之苦也矣、吾佛如來說八福、以建造橋梁為其一焉、若人信如來之金口誠諦之語、於此橋施入一紙半錢者、成就現當二世之福田、誇無比之樂者也、仍而勸進趣如件、

夜雪二首

五更風冷夢魂驚、忽聽窓前竹有聲、試出柴門摩眼見、六花鋪玉滿庭明、

其二

冷颼吹雪透松牖、燈下殘經不忍看、活火煮茶將汲水、孤舟乘興落前灘、

冬夜憶南山

今年別業冷難禁、憶是南山應雪深、鴈擊長空風烈夜、月樓染筆欲傳音、

春日書懷

雲幕四圍鋪錦茵、江堤芳草碾雕輪、遲々暖日花留客、嫋々和風柳拂人、芟草童兼黃犢睡、樂漁士與白鷗親、野僧不管世間事、好向空山獨過春、

訪友不遇

性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過私
第談話之次見示公之漫興之玉詩一篇
願生拜之不得已租述柔詞以汚瀆光詞之韻
末云尔

踏雪侵寒偶訪尋、幽庭臘菊潔人心、山童迎我相對
語、僧在翠微煙樹深、

性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過私
第談話之次見示公之漫興之玉詩一篇
願生拜之不得已租述柔詞以汚瀆光詞之韻
末云尔

太求無限仰祈天、舊債欲還金不全、飯米副無迷惑
極、給人催促復攻咽、

江樓晚景

晚上江樓沙鴈連、行人遊子趁漁船、不知何處最勝

是万里無雲得月先、

承應四乙未年行年十七

歲旦

暖逼竹窓精舍春、鴻鉤氣轉一回新、山々梅柳皆呈
瑞、戸々韭葱共祝晨、岩口叢篁含翠靄、城頭廣陌漲
紅塵、野僧活計只蔬菜、不用屠蘇不厭貧、

佛涅槃

毀樹衰枯蒼色變、龍天涕泣不堪戀、五千大藏說喃

踏雪侵寒偶訪尋、幽庭臘菊潔人心、山童迎我相對
語、僧在翠微煙樹深、

性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過性秀法印寶座前曩日令弟子宏玄公見過私
第談話之次見示公之漫興之玉詩一篇
願生拜之不得已租述柔詞以汚瀆光詞之韻
末云尔

太求無限仰祈天、旧債欲還金不全、飯米副無迷惑
極、給人催促復攻咽、

江樓晚景

晚上江樓沙鴈連、行人遊子趁漁船、不知何處最勝

是、万里無雲得月先、

承應四乙未年行年十七

歲旦

暖逼竹窓精舍春、鴻鉤氣轉一回新、山々梅柳皆呈
瑞、戸々韭葱共祝晨、岩口叢篁含翠靄、城頭廣陌漲
紅塵、野僧活計只蔬菜、不用屠蘇不厭貧、

佛涅槃

毀樹衰枯蒼色變、龍天涕泣不堪戀、五千大藏說喃

啼、及到死期臘月扇、

偶題

短筇憂石小溪頭、獨對山花任意遊、知得此中有清
味、一鶯背柳入深幽、

法師大泉欲落成草庵之勸進狀

夫以欲消除罪障、顯現真性者、必須先擇居處、而后
修行也、矣是故經云、在於閑處修攝其心、文于茲內
州錦部郡市村之傍、有妙法寺之故跡、其堂之本尊
者、則弘法大師石刻之地、藏菩薩也、雖然星霜屢遷、
年載倍淹、雕甍飛棟、頽然塵土、只草莽之茫茫耳、予

啼、及到死期臘月扇、

偶題

短筇憂石小溪頭、獨對山花任意遊、知得此中有清
味、一鶯背柳入深幽、

法師大泉欲落成草庵之勸進狀

夫以欲消除罪障、顯現真性者、必須先擇居處、而后
修行也、矣是故經云、在於閑處修攝其心、文于茲內
州錦部郡市村之傍、有妙法寺之故跡、其堂之本尊
者、則弘法大師石刻之地、藏菩薩也、雖然星霜屢遷、
年載倍淹、雕甍飛棟、頽然塵土、只草莽之茫茫耳、予

舊肥州平戸之住僧、倏忽隨緣遊歷諸方、求覓閑靜
之處、深幽之地、欲以爲禪坐誦誦之處、有時經由之
次、歷覽斯處、寒鴉啄田、亂蟬噪野、追念古昔、慨感良
深、仍而激勵誠志、乞求邊方、創造小社、奉請仲哀天
皇之廟靈、以爲村莊之鎮護、亦結一字之草庵、以爲
居處、雖然、財累鉅萬、只憑衆人之助、至如此耳、
茅庵未逮、備具仰願、受諸方檀越之財施、落成斯茅
庵、以爲予之誦經坐禪之處、志願在斯、冀賜青盼而
已、

維時承應第四暮春下澣、僕寓居南紀野山之時、會

旧肥州平戸之住僧、倏忽隨緣遊歷諸方、求覓閑靜
之處、深幽之地、欲以爲禪坐誦誦之處、有時經由之
次、歷覽斯處、寒鴉啄田、亂蟬噪野、追念古昔、慨感良
深、仍而激勵誠志、乞求邊方、創造小社、奉請仲哀天
皇之廟靈、以爲村莊之鎮護、亦結一字之草庵、以爲
居處、雖然、財累鉅萬、只憑衆人之助、至如此耳、
茅庵未逮、備具仰願、受諸方檀越之財施、落成斯茅
庵、以爲予之誦經坐禪之處、志願在斯、冀賜青盼而
已、

維時承應第四暮春下澣、僕寓居南紀野山之時、會

干藝州醫師 玄佐公_干時庭前有白桃之盛開者
僕請_レ公以_テ求_レ作_レ詩見_レ賞歎_之公然而辭故僕不
顧輒輒之欺_レ略述_二樸樸之才綴_二短章一篇以乞_二求
公之詩云_レ公

笑擲

南國春酣風日麗、桃花一樹拆_二幽庭_一、初疑白雪凝梢
上、又見蝶蜂醉不醒、
玄佐雅公、偶遊覽之次、賦_二櫻花詩一篇以見_レ惠于_余
矣、_余披而閱之、則文詞燦爛如_二星斗_一、一天筆勢、雄豪
似_二鯨鯢吸百川_一也矣、_余燕雀小志、樗櫟庸才、不足道

念_二雖然_一、公之慇懃_二所賜不可默而止焉_一、故不愧井
蛙不_レ識_レ海之譏、搜章摘句略承_二光誦之末_一、選_{スト}云_レ公

慈介

千嶂櫻花稱意辰、更加一首益相親、欲酬芳草池塘
句、何似_二玉堂天上人_一、

明曆二丙申年行年十八

元旦

春光猶未到門闌、蘆葦芋魁耐_レ充飢、黃鳥不違_二舊時

于芸州醫師 玄佐公_干于時庭前有_二白桃之盛開者_一
僕請_レ公以_テ求_レ作_レ詩見_レ賞歎_之公然而辭故、僕不
顧輒輒之欺_レ略述_二樸樸之才綴_二短章一篇以乞_二求
公之詩云_レ公

笑擲

南國春酣風日麗、桃花一樹拆_二幽庭_一、初疑白雪凝梢
上、又見蝶蜂醉不醒、
玄佐雅公、偶遊覽之次、賦_二櫻花詩一篇以見_レ惠于_余
矣、_余披而閱之、則文詞燦爛如_二星斗_一、一天筆勢、雄豪
似_二鯨鯢吸百川_一也矣、_余燕雀小志、樗櫟庸才、不足道

念_二雖然_一、公之慇懃_二所賜不可默而止焉_一、故不愧井
蛙不_レ識_レ海之譏、搜章摘句略承_二光誦之末_一、選_{スト}云_レ公

慈介

千嶂桜花稱意辰、更加一首益相親、欲酬芳草池塘
句、何似_二玉堂天上人_一、

明曆二丙申年行年十八

元旦

春光猶未到門闌、蘆葦芋魁耐_レ充飢、黃鳥不違_二旧時

約、雨三聲似報柴扉

偶作

閑庭花草遲春容、岸幘坐來興味濃、何處樓臺有琴奏、儵然獨唯立長松

山家

兒騎羸馬吟林麓、翁打老牛墾石田、婦女慇懃迎客語、沙鍋煎茗挹山泉

春寒

昏昏春意懶凭欄、緩步杖藜不怯寒、猶有溪橋殘雪在、梅花一樹得開難

約、雨三聲似報柴扉

偶作

閑庭花草遲春容、岸幘坐來興味濃、何處樓臺有琴奏、儵然獨唯立長松

山家

兒騎羸馬吟林麓、翁打老牛墾石田、婦女慇懃迎客語、沙鍋煎茗挹山泉

春寒

昏昏春意懶凭欄、緩步杖藜不怯寒、猶有溪橋殘雪在、梅花一樹得開難

於和州葛上郡佐備村風森神宮寺執行土砂
加持之過去帳

恭惟真性幽邃佛祖窺觀無門德光顯赫魔外伏膺有分彌漫六合逼塞十虛煥然在鑑覺之先迥乎出計較之外也矣至其弼中彪外則能建淨刹而示德演妙法以濟苦機根區分方便萬差焉其中有光明真言此乃消鎔罪障積雪之赫日度越生死海之巨船也經云若諸有情具造十惡五逆四重諸罪猶如微塵滿斯世界身壞命終墮諸惡道以是真言加持土砂一百八遍尸陀林中散亡者尸骸上或散墓上

於和州葛上郡佐備村風森神宮寺執行土砂
加持之過去帳

恭惟真性幽邃佛祖窺觀無門德光顯赫魔外伏膺有分彌漫六合逼塞十虛煥然在鑑覺之先迥乎出計較之外也矣至其弼中彪外則能建淨刹而示德演妙法以濟苦機根區分方便萬差焉其中有光明真言此乃消鎔罪障積雪之赫日度越生死海之巨船也經云若諸有情具造十惡五逆四重諸罪猶如微塵滿斯世界身壞命終墮諸惡道以是真言加持土砂一百八遍尸陀林中散亡者尸骸上或散墓上

塔邊皆散之。彼所亡者。若地獄中。若餓鬼中。若修羅中。若傍生中。以一切不空如來毘盧舍那如來真寶本願大灌頂光言神通威力加持土砂之力。應時即得光明身。生於西方極樂國土蓮花化生。儀軌云。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱災惡。得聞此真言秘密神呪而受持。必滅除諸無量苦惱災惡。增長福壽。蒙安穩快樂。又云。誦一遍為誦百億無量大乘經百億無量陀羅尼百億無量法門。其文繁多略。舉撮主矣。厥神德妙用。深冲遠眇。設使百千諸佛齊口稱嘆。不可窮既焉。豈碌々庸々淺根劣器之所宜圖識。

乎自金甌赤鳥。至街童市豎。靡不仰瞻於戲救濟群生之方法。莫大乎焉。莫速乎焉。是故佛子等依此教觀誦光明真言之玄理。開布加持土砂之梵席。誠是此神呪。是百億無數諸佛如來母。百億無數菩薩聖衆母也。宜哉。高祖大師記過去帳。以備菩提之梯磴者。回被駕此帳者。皆悉速出苦域。共臻樂域也矣。弟子等追其蹤而纔効小功。述此帳矣。千希佛天勳力垂。丙炤敬白。

三世諸佛十方薩埵緣覺聲聞等。為淨佛國土成就衆生。

塔邊皆散之。彼所亡者。若地獄中。若餓鬼中。若修羅中。若傍生中。以一切不空如來毘盧舍那如來真寶本願大灌頂光言神通威力加持土砂之力。應時即得光明身。生於西方極樂國土蓮花化生。儀軌云。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱災惡。得聞此真言秘密神呪而受持。必滅除諸無量苦惱災惡。增長福壽。蒙安穩快樂。又云。誦一遍為誦百億無量大乘經百億無量陀羅尼百億無量法門。其文繁多略。舉撮主矣。厥神德妙用。深冲遠眇。設使百千諸佛。齊口稱嘆。不可窮既焉。豈碌々庸々淺根劣器之所宜圖識。

乎自金甌赤鳥。至街童市豎。靡不仰瞻於戲救濟群生之方法。莫大乎焉。莫速乎焉。是故佛子等依此教觀誦光明真言之玄理。開布加持土砂之梵席。誠是此神呪。是百億無數諸佛如來母。百億無數菩薩聖衆母也。宜哉。高祖大師記過去帳。以備菩提之梯磴者。回被駕此帳者。皆悉速出苦域。共臻樂域也矣。弟子等追其蹤而纔効小功。述此帳矣。千希佛天勳力垂。丙炤敬白。

三世諸佛十方薩埵緣覺聲聞等。為淨佛國土成就衆生。

天神七代、地神五代、當所鎮守^{某神}、王城、鎮守諸大神、當國擁護諸大明神、當寺勸請諸大明神、五類諸天、十六大護、總、日本國中大小神祇、為法樂莊嚴威光自在、
奉始龍猛龍智本朝高祖弘法大師三國傳燈諸大阿闍梨耶總顯密諸宗之諸大先德等、為普賢行願皆令滿足、
上自有頂下至無間四州八州欲界無色界橫十方豎三際六道四三途八難二十五有八寒八熱等一百三十六地獄之罪人為皆成佛道、

自神武天王以來代々帝王親王皇子等代々攝政
閑白大臣公卿征夷將軍副將軍諸聖靈等、為皆成佛道、

今日施主所志諸聖靈等、為皆成佛道、

同表白

敬白真言教主大日如來金剛界會三十七尊九會曼荼羅諸尊聖衆并大悲胎藏八葉蓮臺十三大院摩利聖衆法身內證金剛乘教應化開說諸修多羅藏正法輪身菩提薩埵光明真言甚深祕藏五十字義旋轉陀羅尼不空羂索等諸大士等教令輪者諸

天神七代、地神五代、當所鎮守^{某神}、王城鎮守諸大神、當國擁護諸大明神、當寺勸請諸大明神、五類諸天、十六大護、總、日本國中大小神祇、為法樂莊嚴威光自在、
奉始龍猛龍智本朝高祖弘法大師三國傳燈諸大阿闍梨耶總顯密諸宗之諸大先德等、為普賢行願皆令滿足、
上自有頂下至無間四州八州欲界無色界橫十方豎三際六道四三途八難二十五有八寒八熱等一百三十六地獄之罪人為皆成仏道、

自神武天王以來代々帝王親王皇子等代々攝政
閑白大臣公卿征夷將軍副將軍諸聖靈等、為皆成仏道、

今日施主所志諸聖靈等、為皆成仏道、

同表白

敬白真言教主大日如來金剛界會三十七尊九會曼荼羅諸尊聖衆并大悲胎藏八葉蓮臺十三大院摩利聖衆法身內證金剛乘教應化開說諸修多羅藏正法輪身菩提薩埵光明真言甚深祕藏五十字義旋轉陀羅尼不空羂索等諸大士等教令輪者諸

忿怒尊殊和朝密教根本高祖坐禪入定弘法大師
三國傳燈諸阿闍梨耶總佛眼所照恒沙塵數一切
三寶而言、夫以衆生苦惱掃之有神呪一名光明真言
有情患難除之有秘法、號土砂加持、誠是滅罪生善
之軌範、離苦得脫之妙行也、因茲佛子等而今於南
閩浮提大日本國和州葛上郡佐備村風森神宮寺
展光明真言加持土砂之梵筵、祈當寺再興有緣緇
素之佛果時已、清和、首夏將暑、綠柳暗塢、紅花辭枝、
修一日六座之密行、消三有四生之重苦、又五智光
明之印滅有頂無間之暗冥、唱五佛總攝之言、度上

忿怒尊殊和朝密教根本高祖坐禪入定弘法大師
三國傳燈諸阿闍梨耶總佛眼所照恒沙塵數一切
三寶而言、夫以衆生苦惱掃之有神呪一名光明真言
有情患難、除之有秘法、號土砂加持、誠是滅罪生善
之軌範、離苦得脫之妙行也、因茲佛子等而今於南
閩浮提大日本國和州葛上郡佐備村風森神宮寺
展光明真言加持土砂之梵筵、祈當寺再興有緣緇
素之佛果時已、清和、首夏將暑、綠柳暗塢、紅花辭枝、
修一日六座之密行、消三有四生之重苦、又五智光
明之印滅有頂無間之暗冥、唱五佛總攝之言、度上

天下地之群類、凡證得法身之玄理、悉收光明真言
之中、濟拔衆生之方便、莫出秘密總持之外、重冀四
表無事、一人安全、穀稼豐登、村里快樂、伽藍相續、正
法弘通、乃至沙界、平等利濟、敬白、

代人答友書并詩

方切思仰間忽蒙見惠書并詩一章就審 足下冰
雪手韻、瓊瑰襟懷、神明協贊、動履清吉、兌悅殊深承
示諭曰、來與碧禪翁往來詩篇以慰不平一促予之
歸心耳、山川路隔、無縮地之術、如何々々、予學識荒
蕪、器匪登雲、雖然燈火寒窓、孜孜而動、則豈無發揮

天下地之群類、凡証得法身之玄理、悉收光明真言
之中、濟拔衆生之方便、莫出秘密總持之外、重冀四
表無事、一人安全、穀稼豐登、村里快樂、伽藍相續、正
法弘通、乃至沙界、平等利濟、敬白、

代人答友書并詩

方切思仰間忽蒙見惠書并詩一章就審 足下冰
雪手韻、瓊瑰襟懷、神明協贊、動履清吉、兌悅殊深承
示諭曰、來與碧禪翁往來詩篇以慰不平一促予之
歸心耳、山川路隔、無縮地之術、如何々々、予學識荒
蕪、器匪登雲、雖然燈火寒窓、孜孜而動、則豈無發揮

昏蒙之益乎、謾述_二蕪語_一以象_二光誦之韻_一末、切冀_二艾詳實_一、為榮幸、

三復詩篇感淚潛、自慚襪線只汗顏、錦心綉口信無敵、鄙拙那能窺一斑

覺元和南覆

慧林法公硯右爾來久違、道範_二莫莢_一、舒凋不幾更山斗之仰日切于懷_二忽辱_一、賜玉書并頌一篇、伏想足下好山林之閑靜、避朝市之擾亂、天人眷相動履亨嘉不任欣慰之至、不才頃在幽邃之修、秘密之行恭承_二示諭_一歲月如箭、努力勤修、誠是為緇林之

昏蒙之益乎、謾述_二蕪語_一以象_二光誦之韻_一末、切冀_二艾詳實_一、為榮幸、

三復詩篇感淚潛、自慚襪線只汗顏、錦心綉口信無敵、鄙拙那能窺一斑

覺元和南覆

慧林法公硯右爾來久違、道範_二莫莢_一、舒凋不幾更山斗之仰日切于懷_二忽辱_一、賜玉書并頌一篇、伏想足下好山林之閑靜、避朝市之擾亂、天人眷相動履亨嘉不任欣慰之至、不才頃在幽邃之修、秘密之行恭承_二示諭_一歲月如箭、努力勤修、誠是為緇林之

法式桑門之儀教者非此語索之何、以收篋笥永作万世之茲附鴻翼聊修寸楮并述野詩一章少報慙重之教惟時金神按節梧葉響塔更冀循時自愛不悉秋八月廿五日

迫迕在家不足論、緇門寬廓尚渾々、不如譚避囂塵去、去聽空山月下猿、

運敵和南覆

圓痴闍梨硯右久耳、英聲慕蘭之情、依々于中懷然東陲万里地、阻胡越人似參商未由相見徒勞引領耳不謂著履於西関、飛錫於南嶽而、在咫尺

法式桑門之儀教者非此語索之何、以收篋笥永作万世之茲附鴻翼聊修寸楮并述野詩一章少報慙重之教惟時金神按節、梧葉響塔更冀循時、自愛不悉秋八月廿五日

迫迕在家不足論、緇門寬廓尚渾々、不如譚避囂塵去、去聽空山月下猿、

運敵和南覆

圓痴闍梨硯右久耳、英聲慕蘭之情、依々于中懷然東陲万里地、阻胡越人似參商未由相見、徒勞引領耳不謂著履於西関、飛錫於南嶽而、在咫尺

矣忽辱賜雲箋無任欣慰何書中往々推賞褒評
過實自顧謏陋慚懼流汗曾聞足下好遼古之風
致絕塵俗交耽幽洞之煙霞斥稠人擾宜哉
寓此雲嶺也微僧挂錫近在清淨心院異日乘閑
來臨親獲覩眉寓銷胸襟鄙悃幸甚々々縷曲附
面布屬智鏡法師答夏五月六日

紀行

鵲啼岩戶促歸心飛瀑響幽積奏琴南國勝遊無可
數只勞石路樹根侵

七夕

穿針樓上應多詩今夕二星不爽期白鶴青鸞都似
夢銀河映徹小漣漪

東字

炎蒸逼綺櫳赫日逾烘烘厭暑移床榻虛樓西又東
下字

納涼登層塔遠望天接野千峯眼睫邊數里磔盤下
見字

斯境出縈纏遊人少有見書窓愛日長一脈清泉濺
南字

放浪睡方酣涼風來自南幽居鎮如此興味又焉貪

矣忽辱賜雲箋無任欣慰何書中往々推賞褒評
過實自顧謏陋慚懼流汗曾聞足下好遼古之風
致絕塵俗交耽幽洞之煙霞斥稠人擾宜哉
寓此雲嶺也微僧挂錫近在清淨心院異日乘閑
來臨親獲覩眉寓銷胸襟鄙悃幸甚々々縷曲附
面布屬智鏡法師答夏五月六日

紀行

鵲啼岩戶促歸心飛瀑響幽積奏琴南國勝遊無可
數只勞石路樹根侵

七夕

穿針樓上應多詩今夕二星不爽期白鶴青鸞都似
夢銀河映徹小漣漪

東字

炎蒸逼綺櫳赫日逾烘烘厭暑移床榻虛樓西又東
下字

納涼登層塔遠望天接野千峯眼睫邊數里磔盤下
見字

斯境出縈纏遊人少有見書窓愛日長一脈清泉濺
南字

放浪睡方酣涼風來自南幽居鎮如此興味又焉貪

山字

揚扇螢傍砌捲簾月滿山將身處閑寂抵死作痴頑
三寶院灌頂誦經

敬白真言教主大日如來金剛界會三十七尊九會
曼荼羅諸尊聖衆并大悲胎藏八葉蓮臺十三大院
摩利聖衆佛性無漏三摩耶戒大小權實諸修多羅
藏正法輪身金剛薩埵般若佛母教令輪者降三世
尊不動明王殊本朝高祖遍照金剛三國傳燈諸阿
闍梨耶總淨法界宮密嚴國土帝網重々四万三寶
境界而言夫傳法灌頂事業者一切如來所共稱嘆

山字

揚扇螢傍砌、捲簾月滿山、將身處閑寂、抵死作痴頑
三寶院灌頂誦經

敬白真言教主大日如來金剛界會三十七尊九會
曼荼羅諸尊聖衆并大悲胎藏八葉蓮台十三大院
摩利聖衆佛性無漏三摩耶戒大小權實諸修多羅
藏正法輪身金剛薩埵般若佛母教令輪者降三世
尊不動明王殊本朝高祖遍照金剛三國傳燈諸阿
闍梨耶總淨法界宮密嚴國土帝網重々四万三寶
境界而言夫傳法灌頂事業者一切如來所共稱嘆

之法印八大祖師所親受傳之密儀也亦則十地菩
薩未能窺窬二乘外道豈得近傍乎厥教之甚深奧
秘不可盡于言矣伏惟現前大阿闍梨耶定慧內彌
兼修三密德行外彪光被四表加旃嗣高祖之嫡裔
受尊師之末流慈育諸弟子推其仁軌範一寺自當
其智可謂至矣盡矣蔑以加于此也矣曰若受者新
阿闍梨耶言辯肅穆過智顗之無碍學識宏博超禪
里之滑稽將又當山也小角練修之名岫鑑真聽法
之靈崑是故今於此道場正演暢三聚木叉時維三
秋半過四山正紅葉落歸根之節正是悉地成就之

之法印八大祖師所親受傳之密儀也亦則十地菩
薩未能窺窬二乘外道豈得近傍乎厥教之甚深奧
秘不可盡于言矣伏惟現前大阿闍梨耶定慧內彌
兼修三密德行外彪光被四表加旃嗣高祖之嫡裔
受尊師之末流慈育諸弟子推其仁軌範一寺自當
其智可謂至矣盡矣蔑以加于此也矣曰若受者新
阿闍梨耶言辯肅穆過智顗之無碍學識宏博超禪
里之滑稽將又當山也小角練修之名岫鑑真聽法
之靈崑是故今於此道場正演暢三聚木叉時維三
秋半過四山正紅葉落歸根之節正是悉地成就之

時者手波旬失力逃走聖衆垂慈證明敬白

明曆三丁酉年行年十九
仁和寺御室灌頂之時作并詩

時維明曆第三歲舍丁酉淑氣和暢之節韶華明媚之日某寓于村舍傳聞法務門主入於秘密之道場沐于瑜伽之法水也矣倏忽發志曰若是自非佛祖擁護因緣成熟豈得奉拜尊特之威容乎繇旃破衣蔽躰短褐掛肩不遠乎千里未日而到于此處矣已而幢幡飄飄近悅群衆之眼鈴鐸鏗鏘遠驚諸天之耳梵唄傳響僧伽列座抑又奉拜法務門主威儀嚴肅徐徐入堂焉予井蛙之見薪棘之才無足道

時者乎波旬失力逃走聖衆垂慈証明敬白

明曆三丁酉年行年十九

仁和寺御室灌頂之時作并詩

時維明曆第三歲舍丁酉淑氣和暢之節韶華明媚之日某寓于村舍傳聞法務門主入於秘密之道場沐于瑜伽之法水也矣倏忽發志曰若是自非佛祖擁護因緣成熟豈得奉拜尊特之威容乎繇旃破衣蔽體短褐掛肩不遠乎千里未日而到于此處矣已而幢幡飄飄近悅群衆之眼鈴鐸鏗鏘遠驚諸天之耳梵唄傳響僧伽列座抑又奉拜法務門主威儀嚴肅徐徐入堂焉予井蛙之見薪棘之才無足道

念雖然依不勝歡喜踊躍之至漫綴野偈一章粗述所志云尔

不圖植宿因今拜此真身備德還備美有灵復有神
万人成隊日百鳥銜花晨自慚才碌々意趣無由申
野遊而歸之次不知何處而來矣有一小童持
詩一篇來而捧予予開之閱之不得默而
止以賡乎韻末而待於小童之來而請酬答詩
一首

先時惠台製一章厥言也猶玄團積玉天非夜光予
江湖散人山野浪子菲蒙不才不足道念雖然理也

念雖然依不勝歡喜踊躍之至漫綴野偈一章粗述所志云尔

不圖植宿因今拜此真身備德還備美有灵復有神
万人成隊日百鳥銜花晨自慚才碌々意趣無由申
野遊而歸之次不知何處而來矣有一小童持
詩一篇來而捧予予開之閱之不得默而
止以賡乎韻末而待於小童之來而請酬答詩
一首

先時惠台製一章厥言也猶玄團積玉天非夜光予
江湖散人山野浪子菲蒙不才不足道念雖然理也

不可不報慇懃所賜瑤篇故搜章摘句漫述一篇以
賡光誦之末選云尔

花光柳色濕和天一日在家似隔年惠以瓊瑤酬以
李不堪相會恨綿々

即事

千里鶯啼三月天命哉相遇又新年賦詩汲酒消愁
客花落寺前正似綿

一乘山瀧谷寺緣記

竊遡觀當寺之濫觴聞諸先志曰前古廐戶王子在
世之時手自刻阿彌陀佛尊像安置此峯矣厥後露

往霜來既向五百餘歲之時桐尾高辨以白上山施
無畏寺為練行之道場側聞此峯有靈異之像每日
詣至拜遶矣嘗相傳也已矣自尔已降四百餘歲風
雪侵害梁棟摧折無人修飾漸近敗落矣且又八人
起野一時為灰矣雖然尊像不遭燒壞之難立灰燼
之中宛然若生矣於越同郡栖原里有中村長兵衛
者原是深信之士也嘗此峯崇尚尊像之奇異歎
慨堂宇之破毀扣扇於緇庶擊鼓於遠近乞求微志
建立小堂以奉安置尊像焉然而請記於予矣予再
三固辭敢不允客何不忍窺管戴盆之誚謾汗剗藤

不可不報慇懃所賜瑤篇故搜章摘句漫述一篇以

賡光誦之末選云尔

花光柳色濕和天一日在家似隔年惠以瓊瑤酬以

李不堪相會恨綿々

即事

千里鶯啼三月天命哉相遇又新年賦詩汲酒消愁
客花落寺前正似綿

一乘山瀧谷寺緣記

竊遡觀當寺之濫觴聞諸先志曰前古廐戶王子在
世之時乎自刻阿彌陀佛尊像安置此峯矣厥後露

往霜來既向五百餘歲之時桐尾高弁以白上山施
無畏寺為練行之道場側聞此峯有靈異之像每日
詣至拜遶矣嘗相傳也已矣自尔已降四百餘歲風
雪侵害梁棟摧折無人修飾漸近敗落矣且又八人
起野一時為灰矣雖然尊像不遭燒壞之難立灰燼
之中宛然若生矣於越同郡栖原里有中村長兵衛
者原是深信之士也嘗此峯崇尚尊像之奇異歎
慨堂宇之破毀扣扇於緇庶擊鼓於遠近乞求微志
建立小堂以奉安置尊像焉然而請記於予矣予再
三固辭敢不允客何不忍窺管戴盆之誚謾汗剗藤

後賢儻有餘閑冀艾詳之

訪僧不遇

老杉古檜幾千重
居與人間迴不同
飛錫如今何處去
伽梨掛在岸邊松

野遊

爛熳衆芳爭艷妍
行過水際與山巔
却疑金谷繁華地
此勝遊巨海涓

夜

聒敲竹牖雨如繩
春夜似秋愁不勝
遊子有情來相訪
五更灯下未眠僧

幽居即事

不管世煩罵蝸庵
蹤跡泯凭闌風透褐
捲箔月侵茵
閑寂蟬交友往來蝶故人
讀書窓下罷緩步古溪濱
訪友不逢

溪丫山際歇還涉
苔徑斜開蒼竹中
頻扣柴扃人不見
簷間唯有石榴紅

金剛山記

本邦多大山臣堅然其突然秀中煥乎可觀者其惟金剛山乎以夫斯山者法基菩薩常在說法之妙窟小角婆塞精進修行之奇區也下睨衡岱其若丘并

後賢儻有余閑冀艾詳之

訪僧不遇

老杉古檜幾千重
居與人間迴不同
飛錫如今何處去
伽梨掛在岸邊松

野遊

爛熳衆芳爭艷妍
行過水際與山巔
却疑金谷繁華地
此勝遊巨海涓

夜

聒敲竹牖雨如繩
春夜似秋愁不勝
遊子有情來相訪
五更灯下未眠僧

幽居即事

不管世煩罵蝸庵
蹤跡泯凭闌風透褐
捲箔月侵茵
閑寂蟬交友往來蝶故人
讀書窓下罷緩步古溪濱
訪友不逢

溪丫山際歇還涉
苔徑斜開蒼竹中
頻扣柴扃人不見
簷間唯有石榴紅

金剛山記

本邦多大山臣堅然其突然秀中煥乎可觀者其惟金剛山乎以夫斯山者法基菩薩常在說法之妙窟小角婆塞精進修行之奇區也下睨衡岱其若丘并

吞和內以貫天石鬼巖兮臨險木鬱弗兮掩明遐邇
十州窮目迢遞降陟萬人連踵絡繹瑞草耐秋宵露
靈霽靈芝茁春朝旭漱澹颺兮鳴條之風清焦桐之
一曲黶黶單岳之雲凝浣紗之千匹及到彼峯嶸之
巔嵒嶸之岑猿父哀吟獐子長嘯遊人傷其雅情騷
士放其逸懷下則有豺狼之馴僧麝麝之伴童上則
有孕峰之璠璣飛光而璀璨藏岫之玻瓈流潤而玲
瓏閣也楮聖門也丹碧廊廡邃深齊于姑射之宮鈴
鐸清亮比于祇園之殿住徒傳宗來學負笈雖兼諸
嶽之怪奇若茲山之無量也余尚奇勝之有品怒靈

「②30ウ

異之無記訪其所名不詳因由孟浪鄙藻略摛梗概
又幸得短篇一章並附于稿末云
扶桑屹立金剛山名利上方離市闌鈴響鐸々鳴佛
殿鐘聲殷々透禪閣撫從綠樹繁陰出僧自白雲深
處還清淨空虛是非外林間石淺水潺湲
和雲清七夕韻
壓倒曹劉胸宇寬寄投好句使人看唱和不得恨難
耐謾學穿針十二欄

異之無記訪其所名不詳因由孟浪鄙藻略摛梗概
又幸得短篇一章並附于稿末云
扶桑屹立金剛山名利上方離市闌鈴響鐸々鳴佛
殿鐘聲殷々透禪閣撫從綠樹繁陰出僧自白雲深
處還清淨空虛是非外林間石淺水潺湲
和雲清七夕韻
壓倒曹劉胸宇寬寄投好句使人看唱和不得恨難
耐謾學穿針十二欄

「②31才

※ 丁才左部分が切り取られている。

※ 丁ウ右部分が切り取られている。

病中偶作

平生鉄肺肝 今日更凄酸
案上讀書擲 鑪中煎藥乾
有蛛封夕牖 無僕供朝餐
新以斯身軀 強成萬種觀

閑居

掃盡蜘蛛壁上粘 青山綠樹足安恬
閑軒向暮無人訪 風鐸喃喃語短簷

送仁公之西芸

詩卷寄投此送君 風清天遠散朝氛
閑窓月下亦無友 滄海舟中只見雲
去日金英發幽艷 歸來玉骨吐

病中偶作

平生鉄肺肝 今日更凄酸
案上讀書擲 鑪中煎藥乾
有蛛封夕牖 無僕供朝餐
新以斯身體 強成萬種觀

閑居

掃盡蜘蛛壁上粘 青山綠樹足安恬
閑軒向暮無人訪 風鐸喃喃語短簷

送仁公之西芸

詩卷寄投此送君 風清天遠散朝氛
閑窓月下亦無友 滄海舟中只見雲
去日金英發幽艷 歸來玉骨吐

奇芬莫愁西國炯波路常在芦花白鷺群

次隆意夜雪韻

一聲折竹響空山 寒枕夢驚忙了閑
因思當年韓謫處 征驂不進擁藍閑

又

烏瓶凍折苦風寒 乘興孤舟涉激湍
只怯前峯松折去 明朝不似舊時看

又

寒鴉集樹噪噉々 吹雪北風利似刀
橋斷幽齋人迹步 樽前醉著數盃醪

奇芬 莫愁西國炯波路 常在芦花白鷺群

次隆意夜雪韻

一聲折竹響空山 寒枕夢驚忙了閑
因思當年韓謫處 征驂不進擁藍閑

又

烏瓶凍折苦風寒 乘興孤舟涉激湍
只怯前峯松折去 明朝不似旧時看

又

寒鴉集樹噪噉々 吹雪北風利似刀
橋斷幽齋人迹步 樽前醉著數盃醪

苦雪

奮怒膝六遣天魔奈此苦寒懶衲何茅屋壁疎衣被薄題詩呵筆意蹉跎

途中苦雪

欲宿欲行思不禁凍雲四下雪淋淋莫言蜀道更艱險別有六花惱客心

萬治元戊戌年行年二十

萬治二己亥年行年二十一

再營小堂安置阿弥陀尊像寄附觀心寺狀

苦雪

奮怒膝六遣天魔奈此苦寒懶衲何茅屋壁疎衣被薄題詩呵筆意蹉跎

途中苦雪

欲宿欲行思不禁凍雲四下雪淋淋莫言蜀道更艱險別有六花惱客心

萬治元戊戌年行年二十

萬治二己亥年行年二十一

再營小堂安置阿弥陀尊像寄附觀心寺狀

熟惟聚沙為塔之戲終獲等正覺之果以土号麁之施遂感轉輪王之報而矧舉其緯之旋替資厥力之不贍乎成功復舊之德迷盧之筆滄溟之墨豈所宣甄矣曰若內州錦縣有觀心寺推究權輿職觀基漸芟夷秦莽是弘法大師也張恢殿閣是實惠和尚也其境也則北斗之奇區南帝之靈廟如意輪之堂鬼子母之社妙崛神宇往々而夥就中有一个之堂所安之尊是安養教主無量壽如來也曠舒幹轉葛裘代謝廊廂棟梁可憐塵土然像又遭掠劫存者惟礎已矣桑門之僧予非歲絕群始住此寺自見于斯荒

熟惟聚沙為塔之戲終獲等正覺之果以土号麁之施遂感轉輪王之報而矧舉其緯之旋替資厥力之不贍乎成功復舊之德迷盧之筆滄溟之墨豈所宣甄矣曰若內州錦縣有觀心寺推究權輿職觀基漸芟夷秦莽是弘法大師也張恢殿閣是實惠和尚也其境也則北斗之奇區南帝之靈廟如意輪之堂鬼子母之社妙崛神宇往々而夥就中有一个之堂所安之尊是安養教主無量壽如來也曠舒幹轉葛裘代謝廊廂棟梁可憐塵土然像又遭掠劫存者惟礎已矣桑門之僧予非歲絕群始住此寺自見于斯荒

榛夙夜以再營之事為念焉雖然予非麻鞋一屋之鉅富無胡椒八百之蓄積只恨宿因微薄福報渺少憤然發心馳騁四國勸勵十方使唱無量壽尊名號結善緣資冥福其人姓名載在記錄以藏于堂然後就結緣衆告所志田丐于些々之財求於少々之施累簣成山積塵為嶽雕甍綉闥傑柱飛棟輪奐復古焉又得叡嶽慈覺手刻之無量壽尊像而安置之復使善畫雪舟末裔等五圖觀世音得大勢兩脇士像于佛殿之兩扉矣原夫此尊是三輩攝取慈航遠航生死之海十惡引導擔磴遙磴涅槃之岸赫日之光

照破猛焰之獄懸河之辯警誘癡闇之迷無限大悲不盡長壽汽德至哉莫加于焉篤信檀樾今生之益來際之報噫厥可知也矣事既落慶以委附於滿寺僧衆求臨時勤修無有遺闕例日講供終不斷絕哀情所唏只在于斯繇旃勒之于狀以貽後代之覽云萬治第二屠維大淵獻二月初三江湖浪子性遍謹書

請特沐十方緇白勦力修補不動明王尊像狀茲審勃陀之為攝化也示容四八索多之為極拔也變躬百億蠢々之為迷惑也因之悟路兀々之為意

榛夙夜以再營之事為念焉雖然予非麻鞋一屋之鉅富無胡椒八百之蓄積只恨宿因微薄福報渺少憤然發心馳騁四國勸勵十方使唱無量壽尊名號結善緣資冥福其人姓名載在記錄以藏于堂然後就結緣衆告所志田丐于些々之財求於少々之施累簣成山積塵為嶽雕甍綉闥傑柱飛棟輪奐復古焉又得叡嶽慈覺手刻之無量壽尊像而安置之復使善畫雪舟末裔等五圖觀世音得大勢兩脇士像于佛殿之兩扉矣原夫此尊是三輩攝取慈航遠航生死之海十惡引導擔磴遙磴涅槃之岸赫日之光

照破猛焰之獄懸河之弁警誘癡闇之迷無限大悲不盡長壽汽德至哉莫加于焉篤信檀樾今生之益來際之報噫厥可知也矣事既落慶以委附於滿寺僧衆求臨時勤修無有遺闕例日講供終不斷絕哀情所唏只在于斯繇旃勒之于狀以貽後代之覽云萬治第二屠維大淵獻二月初三江湖浪子性遍謹書

請特沐十方緇白勦力修補不動明王尊像狀茲審勃陀之為攝化也示容四八索多之為極拔也變躬百億蠢々之為迷惑也因之悟路兀々之為意

癡也遇之開霧至若阿遮跳躑摩醯悶絕業壽驚飈
此時始息煩惱洵汰斯日彈涸青蒲出砥刮生盲之
膜翳紅焰靡旗焚煩胸之塵坩一日懸天顯智愚之
無差二童立側標臧否之罔措且又唱名號則灾殃
速蠲結印契則慶祥倏臻皇矣唐哉不可得稱予頃
有感應求獲刻像欲修補之無片布有伏蘄街童市
堅勦力同志半粒一弁以成斯功然則檀主等現益
當報嶽高海深寸棘所希偏在于斯萬治茅二屠維
大淵猷清和初八檜岳寓居沙門宏玄謹狀

送仍雲叟之東武

為君惜別武州行 燈盞膏殘方五更處 紅花皆憇
蝶村 綠柳遍流鶯 今宵愁髮三千丈 明日征途二
百程 此去一年若相語 莫違茗約與詩盟

春雨

陰雲頻捲暖風來 山色失青晚未開 思被今宵檐滴
觸明朝落盡折殘梅

長安寺在江州大津驛館之背帶山倚岫凭欄
下瞰一碧万頃舟人競渡漁歌互答却怪西湖
之涌出吾國又疑多景之飛來本邦清賞不已
幽懷何盡賦平淡之一律叙勝絕之千狀

痴也遇之開霧至若阿遮跳躑摩醯悶絕業壽驚飈
此時始息煩惱洵汰斯日彈涸青蒲出砥刮生盲之
膜翳紅焰靡旗焚煩胸之塵坩一日懸天顯智愚之
無差二童立側標臧否之罔措且又唱名号則灾殃
速蠲結印契則慶祥倏臻皇矣唐哉不可得稱予頃
有感應求獲刻像欲修補之無片布有伏蘄街童市
堅勦力同志半粒一弁以成斯功然則檀主等現益
當報嶽高海深寸棘所希偏在于斯万治第二屠維
大淵猷清和初八檜岳寓居沙門宏玄謹狀

送仍雲叟之東武

為君惜別武州行 燈盞膏殘方五更 処々紅花皆憇
蝶 村々綠柳遍流鶯 今宵愁髮三千丈 明日征途二
百程 此去一年若相語 莫違茗約與詩盟

春雨

陰雲頻捲暖風來 山色失青晚未開 思被今宵檐滴
觸明朝落盡折殘梅

長安寺在江州大津驛館之背帶山倚岫凭欄
下瞰一碧万頃舟人競渡漁歌互答却怪西湖
之涌出吾國又疑多景之飛來本邦清賞不已
幽懷何盡賦平淡之一律叙勝絕之千狀

長安寺路入溪隈占新宋寥隔市埃樓兀林端簷額
秀浪平湖面鏡容開舟盈雲夢掠烟去鐘學渌湘告
晚來清夜沈吟風月處心頭洗盡十年灰

正法寺在江之園城寺殿安觀音大士其景奇
絕自古已來詞客騷人接踵布武僕雖慙陪蘭
亭之席末然復不可點止課虛抽毫

含山返照映孤城岩戶深鎖灯火明殿倚峭峯林麓
遠江噴新月石階清像矣時見龍鬼繞僧老幾締鷗
鷺盟掃蕩妄心塵事盡唱號換却寶珠璣

隣于正法寺有奇區是亦安觀音大士寺以近

松榜景夥地幽茂林脩竹市路官橋迹遐滿目
人初不識此有勝境頃年貴賤老少雲合霧會
皆謂出正法寺之右

寺是近松人是僧到頭名利等蝸蠅禪龕富景難窮
眼暖艸鋪毡宜曲肱晴岫吐花紅段々石階印蘚碧
層々山嵐醒夢七三患水月分光四八應愍庶有祈
方有感視生無愛亦無憎觀成一實真中道誦熟普
門最上乘江色標心々潔淨溪聲轉法々常恒數行
神呪堪消罪猶更仰瞻誓願弘

山中對客

長安寺路入溪隈占斷寂寥隔市埃樓兀林端簷額
秀浪平湖面鏡容開舟盈雲夢掠烟去鐘學渌湘告
晚來清夜沈吟風月處心頭洗盡十年灰

正法寺在江之園城寺殿安觀音大士其景奇
絕自古已來詞客騷人接踵布武僕雖慙陪蘭
亭之席末然復不可點止課虛抽毫

含山返照映孤城岩戶深鎖灯火明殿倚峭峯林麓
遠江噴新月石階清像矣時見龍鬼繞僧老幾締鷗
鷺盟掃蕩妄心塵事盡唱號換却寶珠璣

隣于正法寺有奇區是亦安觀音大士寺以近

松榜景夥地幽茂林脩竹市路官橋迹遐滿目
人初不識此有勝境頃年貴賤老少雲合霧會
皆謂出正法寺之右

寺是近松人是僧到頭名利等蝸蠅禪龕富景難窮
眼暖艸鋪毡宜曲肱晴岫吐花紅段々石階印蘚碧
層々山嵐醒夢七三患水月分光四八應愍庶有祈
方有感視生無愛亦無憎觀成一實真中道誦熟普
門最上乘江色標心々潔淨溪聲轉法々常恒數行
神呪堪消罪猶更仰瞻誓願弘

山中對客

炷香曲几氣氤氲與客清談至日曛君要識吾高潔
否也賢白雪與青雲

萬治三庚子年行年二十二

元日

桶裡野蔬冰始融新知淑氣溢簾櫳屠蘇蠲孽三陽
泰椒頌祝祥千里同舊漏傳更松牖白破鐺烹粥竹
爐經芋魁餅子和菜蕨也似簞瓢陋巷中

又

公子賀春處車塵漲早衙更無樽祝壽只有錫摧邪
牆角帶殘雪山頭籠薄霞新年逾歎息時事亂如麻

和仍雲叟

詩句讀來慰楚情喉唇稍覺蕙蘭生當年孫興今存
否尚有鏗金曼王聲

訪堯圃公不遇經旬寄之

特地牽朋曾扣門玉人不見轉消魂野花尚有三春
約何故至今無一言

請特蒙十方貴賤之助力再興河內州丹南郡
野中山德蓮寺本堂勸進狀

曰若稽古籍當寺者是廐戶皇子創造之奇宇醫王
救世降現之靈區也杉檜梢茂久占不死之福庭池

炷香曲几氣氤氲與客清談至日曛君要識吾高潔
否也賢白雪與青雲

萬治三庚子年行年二十二

元日

桶裡野蔬冰始融新知淑氣溢簾櫳屠蘇蠲孽三陽
泰椒頌祝祥千里同舊漏傳更松牖白破鐺烹粥竹
爐紅芋魁餅子和菜蕨也似簞瓢陋巷中

又

公子賀春處車塵漲早衙更無樽祝壽只有錫摧邪
牆角帶殘雪山頭籠薄霞新年逾歎息時事亂如麻

和仍雲叟

詩句讀來慰楚情喉唇稍覺蕙蘭生當年孫興今存
否尚有鏗金曼王聲

訪堯圃公不遇經旬寄之

特地牽朋曾扣門玉人不見轉消魂野花尚有三春
約何故至今無一言

請特蒙十方貴賤之助力再興河內州丹南郡
野中山德蓮寺本堂勸進狀

曰若稽古籍當寺者是廐戶皇子創造之奇宇醫王
救世降現之靈區也杉檜梢茂久占不死之福庭池

沼浪清淨湛拔苦之悲水初月藉影于纖々之柔艸
微風扇涼於落々之長松是寺觀之甲勝信王畿之
神靈也然乃醫王如來者二六大願彰因行之弘遠
四八妙相標果德之純淨七難九橫輪燈所炷厄命
絕福神幡能續名聞高遠四瀛之所欽仰智德廣大
十方之所崇敬况又觀音大士者已於往世也則渾
十身而唱正法明之大覺今於現在也則恤五趣而
得觀世音之尊号三毒七難盪一禮之題二求兩願
集一稱之吻就中設欲求男之意願與福德智惠之
胤嗣設欲求女之希望感端正有相之女裔貴賤合

沼浪清淨湛拔苦之悲水初月藉影于纖々之柔艸
微風扇涼於落々之長松是寺觀之甲勝信王畿之
神靈也然乃醫王如來者二六大願彰因行之弘遠
四八妙相標果德之純淨七難九橫輪燈所炷厄命
絕福神幡能續名聞高遠四瀛之所欽仰智德廣大
十方之所崇敬况又觀音大士者已於往世也則渾
十身而唱正法明之大覺今於現在也則恤五趣而
得觀世音之尊号三毒七難盪一禮之題二求兩願
集一稱之吻就中設欲求男之意願與福德智惠之
胤嗣設欲求女之希望感端正有相之女裔貴賤合

掌歸依王臣屈膝渴仰所以八幡大神垂迹于此地
逾添善逝之妙用敷化於斯攸增熾圓通之神光神
明之所協贊大聖之所亭毒至矣盡矣莫能加焉因
茲昔年名緇招募來學往時檀越傾竭財貨佛閣殿
堂金闕珠樓餘于十及于百矣遭元和乙卯之兵燹
屠於攝內一朝烏有高軌難追篤信易遠禪誦闕而
無人礎石空而莫構可為長大息矣北條氏平朝臣
氏宗公觀斯荒亡慷慨奚堪於是割膏腴田再續花
香沙門覺英勵些々之力抽微々之志將欲纂興堂
宇衣鉢之外無復餘長業廢於已安功墜於幾立今

掌歸依王臣屈膝渴仰所以八幡大神垂迹于此地
逾添善逝之妙用敷化於斯攸增熾圓通之神光神
明之所協贊大聖之所亭毒至矣盡矣莫能加焉因
茲昔年名緇招募來學往時檀越傾竭財貨佛閣殿
堂金闕珠樓余于十及于百矣遭元和乙卯之兵燹
屠於攝內一朝烏有高軌難追篤信易遠禪誦闕而
無人礎石空而莫構可為長大息矣北條氏平朝臣
氏宗公觀斯荒亡慷慨奚堪於是割膏腴田再續花
香沙門覺英勵些々之力抽微々之志將欲纂興堂
宇衣鉢之外無復余長業廢於已安功墜於幾立今

思普扣緇素苦告長幼索一粒米丐半文錢積以成大功焉若尔英檀信士必保長生不死之壽永除困厄苦惱之怖乃至微塵刹界等沾慈雨恒沙有情同證大覺仍勸進旨趣如件

書于中島氏市兵衛尉宗能書寫受持光明真言之事

原夫摠持之為藏義該攝千義醍醐之為藥味超過四味然乃必死已死之人仰焉則鯀病苦死苦之患歸焉則消神德妙用寔非淺根劣器之所知其邊際矣摠持醍醐其門且千一切如來大灌頂光明真言

者醍醐之最摠持之尊者也中島氏市兵衛尉宗能執堅信於此門有稔于茲有時發願曰書寫受持光明真言數千萬遍以祈先亡令婦之妙果且又廻施功德于十方之含灵共期三昌地之圓滿厥旨先已書于紙即今厥功已遂也嗚呼大乎哉真言之神德具足衆勝妙光明之妙用拔濟諸苦難芥竭石磷猶未窮盡在釋已成矣因而就予求記而留貧道不才當仁固辭何克遂述其槩為之而書

書于中島氏宗能修補大日如來之像

夫惟過去殖種現生結果喻響應聲衆生有感佛力

思普扣緇素苦告長幼索一粒米丐半文錢積以成大功焉若尔英檀信士必保長生不死之壽永除困厄苦惱之怖乃至微塵刹界等沾慈雨恒沙有情同證大覺仍勸進旨趣如件

書于中島氏市兵衛尉宗能書寫受持光明真言之事

原夫摠持之為藏義該攝千義醍醐之為藥味超過四味然乃必死已死之人仰焉則鯀病苦死苦之患歸焉則消神德妙用寔非淺根劣器之所知其邊際矣摠持醍醐其門且千一切如來大灌頂光明真言

者醍醐之最摠持之尊者也中島氏市兵衛尉宗能執堅信於此門有稔于茲有時發願曰書寫受持光明真言數千萬遍以祈先亡令婦之妙果且又廻施功德于十方之含灵共期三昌地之圓滿厥旨先已書于紙即今厥功已遂也嗚呼大乎哉真言之神德具足衆勝妙光明之妙用拔濟諸苦難芥竭石磷猶未窮盡在釋已成矣因而就予求記而留貧道不才當仁固辭何克遂述其槩為之而書

書于中島氏宗能修補大日如來之像

夫惟過去殖種現生結果喻響應聲衆生有感佛力

必應猶月印水水將月也非造次之合聲及響也豈
苟旦之遇乎清信士中嶋氏宗能者本越之後州產
也中託居於泉州境津天資朴直稟性堅信雖身絆
塵累而志鄉佛乘名山勝地莫不遊歷矣像精藍無
不巡禮諒是絕世醇信之士也丁寬文壬寅季冬十
三日^{時年四十五}相攸此地遷居今宅鋤鋤開基土木
功至同月廿三日役夫晨起斷地一鑿倏忽於地中
得泥像大日如來一軀形容端嚴儼然如生役夫奇
之報于宗能々々感喜交催取之安於佛堂奉禮為
事花香累日修供積月前所謂非造次之因苟旦之

感而已明年癸卯七月十日之洛之七條刻佛為活
兵部者宅扣造此像之人阿誰兵部一目之曰空海
大師之所刻也君其珍惜之仰信之則書其旨以示
焉於是雕海大師之影像同安寶殿因而跂步於我
山卸笠於予院求予以佛祖二像之開眼供養予諾
而許自余已降朝懺暮海一日不懈午梵夜誦寤寐
無忘閱千万人未有素俗之士尚信法如宗能之
者誠以大日遍照王如來者住祕宮而投藥膏盲之
病始除瘥坐法界而誘機寂種之人今得度至若遍
一切處作大照明超世間日能除諸暗冥應衆生願

必應猶月印水水將月也非造次之合聲及響也豈
苟旦之遇乎清信士中嶋氏宗能者本越之後州產
也中託居於泉州境津天資朴直稟性堅信雖身絆
塵累而志鄉佛乘名山勝地莫不遊歷矣像精藍無
不巡禮諒是絕世醇信之士也丁寬文壬寅季冬十
三日^{時年四十五}相攸此地遷居今宅鋤鋤開基土木
功至同月廿三日役夫晨起斷地一鑿倏忽於地中
得泥像大日如來一軀形容端嚴儼然如生役夫奇
之報于宗能々々感喜交催取之安於佛堂奉禮為
事花香累日修供積月前所謂非造次之因苟旦之

感而已明年癸卯七月十日之洛之七條刻仏為活
兵部者宅扣造此像之人阿誰兵部一目之曰空海
大師之所刻也君其珍惜之仰信之則書其旨以示
焉於是雕海大師之影像同安寶殿因而跂步於我
山卸笠於予院求予以仏祖二像之開眼供養予諾
而許自余已降朝懺暮海一日不懈午梵夜誦寤寐
無忘閱千万人未有素俗之士尚信法如宗能之
者誠以大日遍照王如來者住祕宮而投藥膏盲之
病始除瘥坐法界而誘機寂種之人今得度至若遍
一切處作大照明超世間日能除諸暗冥應衆生願

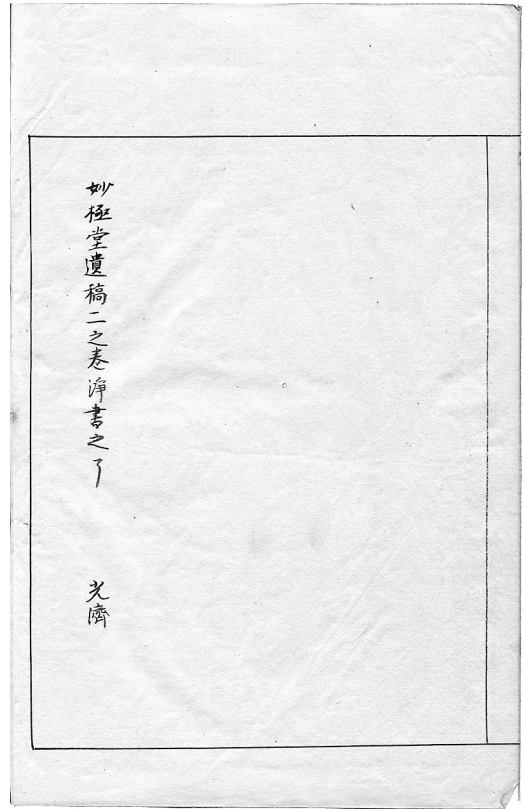
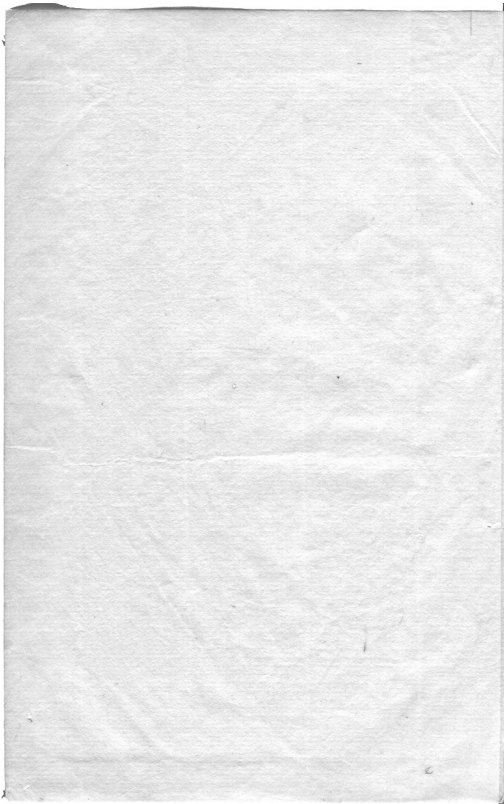
使得成滿比摩尼寶珠普潤世益乏金剛已還之人
心所塵數之尊所不能儔宜矣宗能之篤信特尊繫
念斯像予宏大其操行略錄而書如右

妙極堂遺稿卷之二終

使得成滿比摩尼寶珠普潤世益乏金剛已還之人
心所塵數之尊所不能儔宜矣宗能之篤信特尊繫
念斯像予宏大其操行略錄而書如右

妙極堂遺稿卷之二終

(白丁)

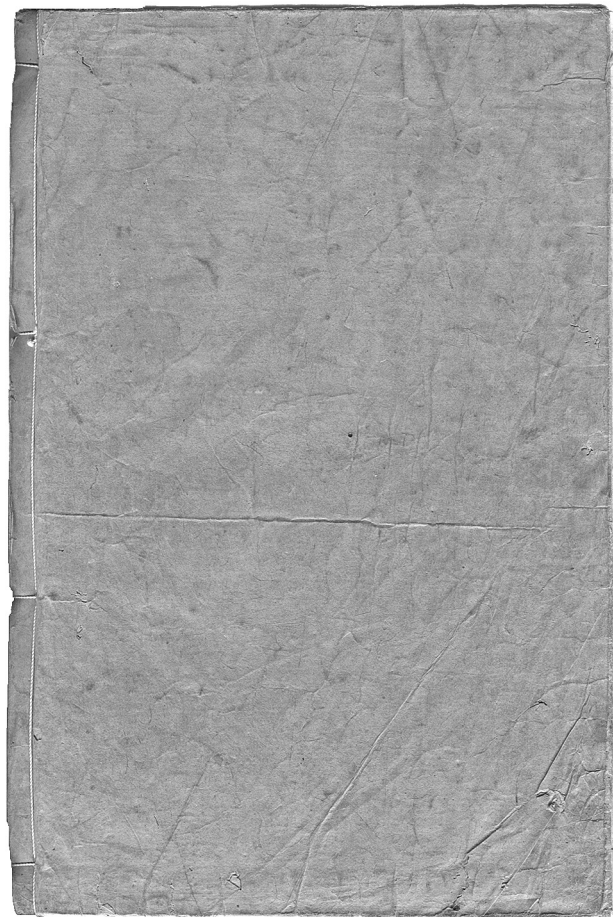


妙極堂遺稿二之卷淨書之了

光濟

妙極堂遺稿二之卷淨書之了

光濟



「②裏表紙

(てらつ まりえ 生活機構研究科生活文化研究専攻修了生)
(せきぐち しずお 歴史文化学科)